



Ritsumeikan University
College of Letters

教 学 の 手 引 き

2005

日 本 史 学 専 攻

文 学 部

Table of Contents

日本史学専攻

I 日本史学専攻 教学紹介

① 日本史学専攻の教学理念と目的	3
② 小集団授業	3
③ 講義科目	4
④ 史料講読など	4
⑤ 人文科学総合講座・他学科関連科目	4
⑥ テーマリサーチ型ゼミナール	5
⑦ 卒業論文・卒業レポート	5
⑧ 日本史研究入門を受講するにあたって ― 1 回生必読 ―	5
⑨ 卒業論文・卒業レポートの作成と提出について ― 4 回生以上必読 ―	21

II 科目一覧

① 科目一覧	36
② 履修方法	38
③ 受講登録上の注意	40

III ユニットプログラムと履修モデル

① ユニットプログラム	43
履修モデル	47

IV 学修を進めるにあたって

① 文献資料室と共同研究室	51
② クラスロッカーの使用方法について	51
③ セミナーハウスの正課用利用の手引き	52
④ 学生印刷室の利用について	53
⑤ 自主ゼミ援助制度について	54
⑥ 「小集団教育推進補助費」の取り扱いについて	54
⑦ 清心館「学生談話室」の利用について	55
⑧ 立命館大学人文学会	55
⑨ 文学部事務室について	56



日本史学専攻 教学紹介

1 日本史学専攻の教学理念と目的

日本史学専攻は、日本の政治・経済・社会・文化・思想などの諸分野の歴史的展開と、これを取り巻く国際的諸条件の全体像を明らかにすることを目的とします。この歴史像の究明を通じて、今日の社会のあり方を考え、未来への展望を切り開く営みが期待されているのです。

そのためには、まず広い視野と豊かな基礎的知識が必要です。この点で人文科学総合講座、他学科・他専攻・他コース関連科目、インスティテュート科目などを積極的に履修することが重要です。また、日本史研究の上でもパソコンやインターネットの操作・活用が必要になっていますので、情報処理に関する科目などの履修が望まれます。

歴史像の究明には、また、鋭敏な歴史意識や実証的で科学的な学問方法が要求されます。主体的で創造的な学問態度を身につけること、社会や文化の諸事象に対する歴史的なものの見方を確立すること、さらには日本史の構造や発展の特質を捉えうる深い思考力を養うことが大切です。地味で根気のいる専門的技能の習得も欠かすことができません。

このような教学目標に沿って、日本史学専攻のカリキュラムは、小集団教育科目（研究入門・基礎講読・演習）を軸に、講義、史料講読の科目を組み合わせて構成されています。そして、各々の履修計画の最終段階に位置するのが卒業論文です。

2 小集団授業

(1) 研究入門（1回生）

「研究入門」は、日本史研究・考古学研究への導入です。与えられた“史実”の理解と記憶が中心であった高校時代の「日本史」の学習と、学問としての日本史研究の違いを体得し、研究主体としての自己形成の方向を見いださねばなりません。授業では主として日本史（文献・考古学）に関する史学理論と日本史研究・考古学研究の実際的方法とが取り上げられます。

(2) 基礎講読（2回生）

「基礎講読」は、各自の研究課題を設定する準備段階です。日本史コース（文献史料をとり扱う）と考古学コース（考古資料をとり扱う）のいずれかのクラスを選択し、それぞれにおいて史・資料の操作や調査の方法を学び、また主要文献の講読による研究史の検討を通じて、自己の問題意識を客観視し、整序し、現代の学問的課題として自覚しなければなりません。ここでの実際の訓練は、殊に特殊問題にも応用できる性質のものでありますから、狭い専門意識にとらわれない旺盛な知識欲・向上心が期待されます。

(3) 演習Ⅰ（3回生）・演習Ⅱ（4回生）

演習Ⅰと演習Ⅱは合同ゼミです。時代別に10クラスを基本とします（考古学コースは、縄文以前、弥生古墳、歴史考古の3時代。日本史コースは、古代、中世前期、中世後期、近世、近代、現代の6時代が原則です。夜の時間帯では、1クラスが開講されます（古代～近現代）。

3回生は卒業論文の課題との関連を十分に検討して、史学史・考古学史上の基本問題を取り上げ、史料・考古資料に立ち入って学説史を批判的に把握し、実証力・構成力を養います。

4回生は卒業論文（6回生以上の夜間主コースは卒業レポート）の作成をめざしますが、演習では各自の研究の進展に応じて中間報告をし、指導を受けます。

小集団科目は日本史学を学ぶ基幹講義であり、いずれも必修または登録必修です。全員が途中で投げ出さずに最後まで修学することが大切です。また、卒業論文は必修科目で全員が提出しなければなりません。

3 講義科目

入門科目の「史学概論Ⅰ・Ⅱ」（1回生担当科目・人文科学総合講座）では、高校時代の歴史の学習と、学問としての歴史学の研究の違いが、さまざまな事例に基づいて具体的に講述されます。日本史のみならず、西洋史・東洋史の研究方法についても言及されますので、全員の履修が望まれます。

「日本史概説Ⅰ～Ⅷ」、「日本現代史概説Ⅰ・Ⅱ」は、単に高校で修得した知識を補足するものではありません。それぞれの時代を専門的に研究している担当者が、現在の研究水準を踏まえて、歴史的発展の様相をテーマに立てて論述します。「日本史概説」はⅠ～Ⅷまで開講され、それぞれ、古代史・中世史・近世史・近代史に分かれて開講されています。「日本現代史概説Ⅰ・Ⅱ」は、現代史の諸問題について講述します。専門分野の研究を深化するためには通史的把握が重要ですので、必要単位以上に履修することが望まれます。

「日本史特殊講義Ⅰ～Ⅹ」「考古学特殊講義Ⅰ・Ⅱ」は、考古学～近現代史に至る歴史上の特定問題が講述されます。学界の第一線で活躍中の担当者が、いままきに取り組んでいる課題について、毎回研究発表のような授業を行います。講義は、担当者の歴史観から実証方法まで、全面的に駆使して展開されますので、日本の歴史、考古学についての基本的な専門知識を修得するばかりではなく、歴史観の批判的摂取、研究課題の様相、史料の状況、論証課程の実際、諸論点の構築や配列の方法など、学ぶべき点が多い科目です。

「日本思想史Ⅰ・Ⅱ」は、日本思想・文化の歴史的展開とその特質について、広く世界史的展開とその特質について、広く世界史的視野から講義します。

「日本史学史」は、日本史研究の歴史について、時代背景や歴史観の変化、さらには最新の国際的史学理論も交えて、幅広く検討します。

考古学については、考古学の特質と方法論を学ぶ「考古学概説Ⅰ・Ⅱ」、考古学研究法の基礎と応用を実践的に学ぶ「考古学研究法Ⅰ・Ⅱ」、考古学研究の歴史について講義する「考古学史」、自然と人間との歴史的関係を考察する「環境考古学」、考古資料の自然科学的分析や保存処理について講義する「文化財科学」、考古資料の解釈を支える歴史的・社会的理論を検討する「理論考古学」、人骨の研究を中心とした「形質人類学」、膨大な情報を客観的に処理し研究に活用する「情報考古学」などからなります。

4 史料講読など

「日本史史料講読」は時代別・分野別に基本的な史料を講読します。およそ歴史的な認識は史料という過去の痕跡を通じて形成されるものですが、史料によって歴史像を構築するためには実に多くの作業が必要です。ここでは史料の批判・分析・解釈、史料の操作法などが実践的に訓練されます。2回生以上の担当科目です。

「古文書学」（3回生担当科目・日本史コース必修）では、加工・編纂されていない第一次史料（原史料）である古文書を用いて、解読の手ほどきを受けるとともに、公私の文書の様式や機能の展開を政治・社会・文化・思想の歴史との関連において学びます。

「考古学外書講読」（3回生担当科目・考古学コース登録必修）は、考古学関連の英語文献の講読によって海外の研究状況について学びます。

「考古学実習入門」（2004年度以降入学生1回生、2003年度以前入学生2回生担当科目）、「考古学実習」（2004年度以降入学生2回生、2003年度以前入学生3回生担当科目、考古学コース必修）は、実際の発掘調査を行って報告書の作成に至る諸技術の鍛錬を行います。

5 人文科学総合講座・他学科関連科目

人文科学総合講座には日本史研究を多彩にするための多様な科目が設置されています。日本史学専攻に関連する科目は別に表示されていますが、いずれも日本史・考古学の研究にとって不可欠な隣接諸科目です。各自の問題意識や研究課題にしたがって、積極的かつ計画的に履修することが望まれます。

6 テーマリサーチ型ゼミナール

テーマリサーチ型ゼミナールは、2003年度からスタートした、文学部が擁する従来の枠組みでは捉えきれない人文学のあらたな分野やテーマ、アプローチを、ゼミ形式で大胆に実践していく、まったく新しい形態のゼミナールです。21世紀の「知」のグローバル化を目指して、人文学に共通する普遍的なテーマ、特定地域を多面的にリサーチしうるテーマ、現在進行形のタイムリーなテーマ、新世紀の社会に直結する実践、実習的テーマなど、現代社会が人文学に求める革新的テーマを設定します。また、テーマリサーチ型ゼミナールでは革新的・斬新なテーマを追求するためにも、常にゼミテーマを見つめ直しています。

3回生のゼミ選択の際には、卒業時（4回生）にどのようなテーマで研究をし、卒業論文執筆をしたいかといった事を考え、ゼミを選択します。その際、自専攻のゼミ、テーマリサーチ型ゼミナールといった選択肢の中で自分に適するゼミを選んでください。

テーマリサーチ型ゼミナールでどのようなテーマのゼミが開講されているのかはシラバスで確認をして頂きたいと思いますが、以下に2005年度、3回生ゼミのいくつかを記しますので是非参考にしてください。

2005年度3回生ゼミテーマ 例)

他者問題と文化理解、文化としての「移動」2、京都から発信する京都文化学、辞書をつくる、ECOTOURISMエコロジーの旅2、

7 卒業論文・卒業レポート

卒業論文は、大学生活の学修・研究の総仕上げであり、全精力を傾けて取り組まなければならない課題です。

内容的には、日本史学界・考古学界の研究水準を踏まえた、自己の問題意識に応えられるものであることが期待されます。そのためには周到な計画と準備、綿密な史資料の収集、粘り強い探究心と構想力、不屈の精神力が必要です。

卒業論文の指導は「演習Ⅰ・Ⅱ」で行いますが、担当教員に日常的に指導・助言を仰ぐほか、積極的に非常勤講師の先生方や学内外の諸先学に意見や批評を求めることも大切です。自主ゼミや研究会などの場も大いに活用すべきです。

なお、日本史専攻では卒業論文の指導を「演習Ⅱ」で行っているため、「演習Ⅱ」の単位を認定できない場合（出席・平常点など各演習の基準による）、卒業論文を提出しても、卒業論文の単位だけを認定することはありません。そのため、卒論の審査、すなわち、試問も行いません。必ず、「演習Ⅱ」を積極的に受講してください。

ただし、「演習Ⅱ」の単位を認定されたのに、卒業論文の単位だけが認定されない場合は、その内容によってあります。「演習Ⅱ」が認定されないのに、卒業論文だけが認定されることはありえないということです。たとえば、「演習Ⅱ」を受講手続だけして、ほとんど出席していない学生は、卒業論文を提出する資格がありません。その点については、「卒業論文題目届」提出前に、必ず担当教員の指導を受けて下さい。

8 日本史研究入門を受講するにあたって — 1回生必読 —

(1) 日本史研究入門の位置づけと研究発表

1. 日本史研究入門とは？

大学での日本史研究を行っていくための基礎的な力を養うために、1回生の研究入門では、大きく分けて次の五つのことがらを学んでいきます。

第一に、日本史とは、決して他人事ではなく自分たち自身の現在に蓄積されてきていることを発見していきます。いうまでもないことですが、現在のわたくしたちの生活は過去の人間の営みを抜きに語ることはできません。わたくしたちの現在の生活において良い点と思われることがらは無論のこと、問題点・矛盾と考えられることも全て過去の歴史と密接につながっています。歴史学研究・日本史研究・考古学研究にとって大切なことは、過去のことがらをこのように常に現在と結びつけて考える眼を養うことです。そのために、研究入門ではわたくしたちの身近な

問題がいかにこれまでの歴史とつながっているのか、さまざまな角度から発見する学習が行われます。例えば、わたくしたちが今も営んでいる年中行事や宗教的儀礼が一体いつどのようにして生まれ、どのように変化して今に至っているのか、あるいはアジア・欧米の人々との関係はどのような歴史的経緯によって現在のようなものになったのかといったようなことを徹底的に掘り下げていきます。さらにはわたくしたちの生まれ育った郷土の歴史を学ぶことも、日本史を身近なところから考えていく上では有効でしょう。

第二に、研究入門ではこれまでの日本史研究の歴史を学んでいきます。高校の教科書を含め、現在日本史のさまざまな流れと考えられていること、基本的歴史事項と考えられていることがらは、多くの歴史学者たちの長年にわたる緻密な史資料の蒐集と考証によって積み上げられ練り上げられたものといえます。しかしながら、それらは常に修正されつづけてきました。新しい史料・遺跡の発見が、それまでの歴史像に重大な変更を迫ることは、考古学、古代・中世史では日常茶飯事ですし、近世・近代史でも多くの史料の中で何を重視するかによって事件の捉え方が変わる場合がしばしばありました。日本史研究上の名著と呼ばれてきた著書も、全てこうした修正を余儀なくされてきたのです。また、どのような名著に対しても必ずといってよいほど異なった見方が提示されてきました。これらについて学ぶことで、現在のわたくしたちの常識になっている日本史像も、やがて修正を迫られる可能性があることを知るようになるでしょう。

第三に、研究入門では日本史研究上の基本史資料になじむことを学んでいきます。現代の歴史学研究・日本史研究・考古学研究は、いうまでもなく史料・遺物によって典拠を示すことが重要な学問的要件となっています。それらはどのような史料・遺物なのか、内容・伝来の経緯・形状などをまず知る必要があります。しかも、およそ研究者の解釈や分析と切り離された史料・遺物はないといってもよいでしょう。史料・遺物を知ることとは、それらにどのような解釈・分析・評価が下されたのかを知ることと不可分なのです。研究入門では、とくに名著と呼ばれる文献が、どのような史料に基づき、それにどのような分析・解釈を施すことで生まれたのかについて重点的に学び、基本史資料になじむ出発点にしたいと思っています。

第四に、研究入門では文章表現法、論文執筆法の基礎について学んでいきます。歴史は、最終的に文章に書かれることによって息吹を与えられていきます。しかも、わたくしたちに影響を与え続けてきた歴史書は、人を説得し感動させる文章によって書かれている場合が少なくありません。この意味では、歴史学研究・日本史研究にとって、文書化・歴史記述という作業は決して軽視すべきものではありません。研究入門では、洗練された名著の文章に触れることになりますが、同時に何度もレポートの提出を求めることで、自分自身の言葉で研究史を整理し、論点を提示し、史料に基づいて歴史を記述することについて訓練していくことになります。また、これと並んでリテラシー入門という授業も行われます。この授業では、論文などを読んで、その要点、問題点を文章化し、それを教員、ティーチング・アシスタント（略称TA）が添削して文章力のアップを図ります。こうしたことを通じて、文章を書くということは、実は自分自身の思考力・分析力を高め、やがて歴史的思考そのものを豊かにしていくことに気づかされることになるはずです。

第五に、日本史研究の基本的作業の仕方、辞書類の検索の仕方、図書館・人文系資料室の利用法について学んでいきます。どのような参考文献・辞書・年表・地図などを座右においておくべきか、また図書館・人文系資料室にはどのような文献・辞書類があり利用はどのようにするのかといった基本的ことがらは無論のこと、論文の検索の仕方、国会図書館など大学外施設の利用法などについても、解説されます。一部は、この「教学の手引き」にも記されていますので参考にしてほしいと思います。さらに、歴史学研究・日本史研究・考古学研究にとって、最も基本的作業ともいえる史料調査・遺蹟調査についても、その実際をできるだけ紹介していきたいと思っています。なお、研究入門は前期と後期で担当者が交代します。できるだけ幅広い分野に目を向けてもらうために、前期（後期）が文献史学を専門とする教員であるならば、後期（前期）には考古学を専門とする教員が担当するようにしています。

2回生の時に考古学コースと日本史コースに分かれます。研究入門を受講しながら、どのコースに進むか熟慮しておいてください。1回生の12月末～1月頃にコースの選択を行う予定です。

2. 研究発表

日本史研究入門では、前期・後期ともに四・五人のグループ（班）に分け、グループごとに与えられたテーマ・課題について調査・討論して全体のレジュメを作成し、授業で発表する形式が採用されています。以下にその流れについて、述べていきます。

①グループ分け

前期・後期ともに研究入門の最初の時間にグループ分けが行われ、全体のテーマに従ったグループごとのテーマ・課題が示されていきます。例えば、近世・近現代の京都について研究していく研究入門では、次のようなグループ分けが行われます。1班「二条城（幕政と京都）」、2班「京都御所（近世の朝廷）」、3班「錦市場（京都の台所と流通）」、4班「島原（京都の遊郭）」、5班「西陣（近世京都の産業と町）」、6班「古義堂、明倫舎等（近世京都の学問）」、7班、「番組小学校（近代京都の町と教育）」、8班「平安神宮（平安遷都1100年の際の京都）」、9班「琵琶湖疏水」、10班「京都駅（近代京都の鉄道）」

なお、通例は最初のグループが十分な準備を行って発表を行うことができるように、グループ分けの後の2～3週間くらいは、担当教員から半期全体にわたるガイダンス的な講義が行われます。

②事前指導・役割分担・討論

グループ分けが決まると、発表の3週間前くらいに担当教員による事前指導が行われます。事前指導は、研究入門の前後か学生・教員の都合のよい時間に各グループごとに行われます。事前指導では、例えば、先の京都研究の場合であれば、それらを調べるための基本文献・基本辞書類・基本史料類について担当教員の方からアドバイスが行われ、次に現地調査の日程・方法などが話し合われます。事前指導が終わったら、学生諸君はこれらの基本文献類について分担を決め、図書館などから借りだし、あるいは人文系資料室でコピーを取るなどして、まず各自で読まなければなりません。また、必要に応じて基本文献以外の文献についても自分たちで調べ、それらを借りだし、あるいはコピーを取るなどして読まなければなりません。レジュメを作成することを考えると、できるだけメモを取りながら読むことが望ましいと思います。文献を読む際に同時に調べておかなければならないのは、これらの文献の著者がどのような研究者なのか、一体いつ発表されたものなのか、同じテーマを扱った文献類の存在の有無と自分が読む文献との違いなどです。次に、グループ全体で実際に現地調査を行い、現在の様相、特質などについて把握し、それが終わったらグループ全員で討論を行います。ここでは、各自の担当文献の内容・問題点・研究状況などについて意見交換を行い、また現地調査についてどのように整理するかも討論します。最後にレジュメ作成の仕方・予定について打ち合わせを行います（レジュメ作成方法・注意などについては、後述）。

③レジュメ作成

発表の10日前くらいからレジュメ作成に取りかかります。レジュメ作成中に足りない点や疑問に感じた点があれば、直ちに図書館・人文系資料室等いき、追加文献を借りだし、コピーを取り、読んで補足していく必要があります。指定文献をまとめるときには、引用箇所と自分たちの見解を厳格に区別してまとめるようにしてください。また、他のグループがその文献を必要としている場合もありますから、他のグループとも密接に連絡を取り合いながら、図書館から借りだした文献についてはできるだけ速やかに返却するなど協力し合うことが大切です。なお、レジュメ作成上でどうしても分からない点があったら、担当教員・助手・TAなどに積極的に質問するとよいでしょう。発表の2・3日前にレジュメ作成を終え、再度チェックと発表当日の分担（発表順番、司会、論点の提示など）を決めます。レジュメ原稿については、担当教員に事前にチェックしてもらうこともお勧めします。

④印刷

レジュメが完成したら、クラス全員分を印刷します。印刷するためには、文学部事務室から「小集団クラス印刷申請書」をもらい、担当教員から一週間前にはサイン（印鑑）をもらっておきます。印刷する際には、それと学生証を事務室で提示し、談話室脇の印刷室の鍵をもらい自分たち自身で印刷します。できれば、印刷されたレジュメはホッチキスなどできちんと綴じておくことが望ましいでしょう。

⑤配布・発表・討論

当日は、研究入門が開始する10分前にはクラスいき、事前に印刷されたレジュメをクラス全員に配布します。授業が始まると直ちに発表です。発表時間は45分から60分くらいというのが標準的なようです。発表グループ以外の学生諸君は、質問・疑問・意見などについて考えながら、発表を聞きます。発表が終わったら、だいたい20分から30分くらいの討論を行います。その際の司会も自分たちのグループで行うのが通例です。また、討論を活発に行うために、発表グループ以外の学生諸君が積極的に発言する必要がありますが、同時に司会の工夫も必要です。最後に、担当教員から10分から20分くらいのコメントがあって授業が終了します。なお、当日発表グループ以外の学生諸君も事前の予習を行っておくことが重要ですが、場合によっては担当教員が予習の有無を調べるために簡単な小テストを行う場合もあります。

⑥出欠・成績・レポート

研究入門の成績は、基本的にグループ発表、出欠状況、夏季・冬季レポートなどによって決定されます。出欠については、当日の発表グループのメンバーが欠席することは厳禁ですが、他の学生諸君も皆勤を心がけてください。また、夏季・冬季レポートの論題は、自分たちのグループの発表は無論のこと、他のグループの発表にも基づいて決定されますので、自分たちのグループ以外の報告・討論などについてももしっかりメモを取り、また参考文献などについても精読しておく必要があります。

(2) レジューメの作り方と見本

1. レジューメの作り方

①レジューメ (resume) とは？

レジューメとは、調べたことの「概要」「大意」を意味し、自分たちで学習・調査・研究したことの概要を書き記したペーパーのことで、研究入門の授業を円滑に実施するために最も重要なものです。何よりも、クラス全員に自分たちのグループが調べ、理解したことを分かりやすく簡潔に説明することを心がけて作成してください。また、活発な討論を行うために、適宜自分たちの分析や意見なども書き記すことが大切です。

②体裁

レジューメの紙型は通例はB4に統一し（A4で印字されたものを2枚並べ、縮小します）、だいたい4枚くらいにまとめてホッチキスで綴じてください。

③内容

[本文冒頭の記載事項] 与えられたテーマ・課題、グループ番号（構成員名）、発表年月日、ページ。

[本文の項目] 指定された基本文献名（所収著書・雑誌名、出版社、刊行年、初出発表年など）、著者名、著者の略歴と研究分野と研究の特質、内容の要旨（内容全体の目次、調べた箇所の特質と論点）、論点の研究史上の位置（新しく明らかにされた点、その反響、主な反論）、同一テーマに直接的・間接的に関わる研究書の一覧（戦後を中心に全て調べるのが望ましいと思います）、文献内で用いられている史料出典一覧（刊行史料は史料集名、未刊行史料は所蔵機関名）、基本史料の全文（原文のまま）と意味、それについての著者の解釈、この指定文献の問題点（過去に批判されてきた点、及びグループで考えた点）、今後の課題とその解決方法。現地調査が実施された場合は、その実施年月日、調査概要、写真や添付資料も。

[本文末尾の記載事項] レジューメ作成に用いられた参考文献一覧。

[参考文献の書き方の例]

論文の場合

a) 著書に収められている場合

藤田覚「近世後期政治史と朝幕関係」（『近世政治史と天皇』所収、吉川弘文館、一九九九年、初出は『岩波講座日本通史15』岩波書店、一九九五年）

b) 雑誌論文の場合

辻本雅史「十八世紀後半期儒学の再検討」（『思想』七六六号、一九八八年）

著書の場合

a) 単著

山尾幸久『日本古代王権形成史論』（岩波書店、一九八三年）

b) 編著・シリーズ等

朝尾直弘他編『日本の社会史』（全八巻、岩波書店、一九八六～八八年）

2. レジューメの見本（次ページ）

レジュメ見本

安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』

報告 担当 7 班 (渡辺・片岡・織田)

<課題文献>

『日本の近代化と民衆思想』 青木書店 1974

<著者の紹介>

略歴：1934 富山県に生まれる
1957 京都大学文学部卒業

現在 一橋大学社会学部教授

専攻：日本思想史

主著：『神々の明治維新』
『宗教と国家 日本近代思想大系 5』
『民衆運動 日本近代思想大系 2 1』
『出口なお』
『日本ナショナリズムの前夜』

<課題文献論文の初出一覧>

第一章 日本の近代化と民衆思想：『日本史研究』78・79号 1965
第二章 民衆道徳とイデオロギー：『歴史学研究』341号 1968
第三章 「世直し」論理の系譜：『日本史研究』85・86号 1996
ひろた・まさき氏との共同研究
第四章 民衆蜂起の世界像：『思想』586号 1973
第五章 民衆蜂起の意識過程：書き下ろし

<課題文献の概要>

〔通俗道徳について〕

通俗道徳とは？

勤勉・儉約・謙遜・孝行等近代日本社会における広汎な人々の日常的な生活規範

これは富・幸福ときわめて本質的なつながりを持つ

↓

富や幸福を得た人間が道徳的に弁護される一結果として付与

1. 思想形成

民衆の持つ諸思想は元禄・享保期から明治20年以降まで形成展開されていく

○石田梅岩二心堂

家の没落に対する民衆の恐怖感
それを防ぐために一悪徳の克服

実践道徳

人間の本质である「心」を知る、外的から内的への変化
↓
自己の精神の権威と自発性のうえに基礎づけられる

↓
人間の無限な可能性を主張するもの

民衆に精神的劣等意識、それに伴う受動性・消極性の克服

農業・商業等産業活動の道徳的正当性の主張

↓

経済と道徳の完全一致

○大原幽学

貧困の原因…私欲・飲酒・賭博等

武士階級を理想化(抽象的) 台庶民は非道徳的存在(具体的)

「この世」の楽しみの否定→禁欲的生活規律を自覚的に身につける

→没落の危機からの脱出

↓
「祭り・芝居・若連中・娘宿・ヨバイ(一応の節度あり)」

↓
商品経済・社会的交流の発展

↓
生活秩序の維持困難

↓

「この世の楽しみ」の急速な節度の喪失

○二宮尊徳

貧困の原因…幽学同様、民衆の悪習の精神までの浸透

↓
脱出するために生活習慣を革新し、新たな禁欲的規律の樹立

↓
生活態度＝精神形態の問題

↑

強制という契約を伴う自己鍛錬の要求

○貧困から脱却するためには通俗道徳を基盤とし、生活態度の改革を行う。

←それには強靱な自己統制が必要

しかしこれには限界がある

広汎な民衆の自己形成

↓
「封建社会末期から近代社会前期という歴史的段階において極度に精神主義的なもの

この段階の民衆…自然・社会を客観的に認識することは困難

精神主義的な自己規律を求めることに熱中

↓

つまり、すべての困難が自己変革により解決できるといふ幻想を生み出す
自己に対し強靱な力を持つ一方、社会について規制力も洞察力も持たない

思想の有効性一家or村

領域外になると具体的なものがイッキに普遍的なものになる

2. 民衆道徳とイデオロギー支配

① 荒廃した村々の復興方策

- ・封建的搾取の制限→撤廃
- ・農業生産力の増大
- ・生活態度の樹立

⇒相互に媒介しあったもの

模範村・・・近代日本の社会体制を基底部から安定化

② 生活態度の変革

- ・若者組の再編成→明治10年までに完全崩壊
- ・青年会、青年団に改称
- ・報徳社の道徳主義的教育と農業技術教育の徹底化

↓

虚偽意識（げゐしぎ）体系の成立

本来社会体制全体の問題は通俗道徳で処理不可能

→虚偽意識によりゴリ押しに処理 ⇒幻想
民衆生活の実態に適応していたヒューマン的性格の喪失
↳欺瞞的、偽善的、独善的なものに転化

◎これを見抜くには

- ・勤儉力行主義批判（福沢、竹越三叉、茅原華山）
- ・通俗道徳の偽善的变化の転化を敏感に感じとる
- ・真摯に生き抜こうとした底辺の民衆の立場

↓

実際は通俗道徳の特有の事情があるため、国民的規模では成立しにくい

経済的社会的秩序＝道徳的人格的秩序

↓

〔結果〕

経済的社会的階層性は道徳的人格的階層性に根拠を持つ

↳転倒した幻想の普遍化

貧乏人は経済的劣敗者→精神劣敗者
罪障観の形成

3. 「世直し」・「世直り」の観念

まず最初に・・・

日本の近代過程において、宗教的異端の伝統が弱い

↳黒住教、金光教等

しかし、様々の痛切な体験を通すと、宗教的權威を振りかざし世直しを求めざるを得ない

近代社会成立期の民衆的な立場からの批判

↳通俗道徳的原理を振りかざしたもの

大きな飛躍の必要性（特質のため）

↓

宗教形態をとる必要性

実際は新宗教は民衆闘争のための世界観にはならない

「世直し」・「世直り」とは？

貧困と抑圧からの解放を求める民衆の幻想

近代政治理論が解放の可能性を現実のものにしない

↓

世直し観念は絶えず再生産

◎敗北の質の大切さ

一揆、打ちこわしは世直しの方向を強く志向

思想的特質

民衆による独自の政治権力の構想の欠如

近代社会成立期の民衆闘争が一般に非宗教的

“民衆は現実だけでなく観念的にも劣等者”

↳支配階級、民衆自身ともに存在

こうした状況下での一揆、打ちこわしは封建権力の批判に至らない

様々な宗教的観念

* 「ミロクの世」観念

東方海上にある浄土に神が住んでいて、民衆の苦しい生活を復興する力が存在し、そこは豊穡な世界である

↳理想世界の幻想として強い生命力を持つ

平穏な日常性の破壊→ミロク世界観念が変革的民衆意識の形成に重要な役割

伝統意識のミロクの世→世直し観念

人々に抑圧されていた欲求に火をつける

* 富士信仰（富士講）

江戸の町人の間の普及に伴い、通俗道徳の主張を中核なものにする

食行身縁の登場・・・日常道徳の真摯な実践を説くもの

↓
理想世・・・人間の努力によってもたらされるもの

封建秩序への自発的服従（支配階級に好都合）

ミロクの世観念＋通俗道徳

↓
妄然とした解放の幻想→通俗道徳の真摯な実践を基準とし、人々の生活を批判する論理に転化

↓
こうした思想にもかかわらず、ミロクの世と言う理想世を民衆が下から構想する限り、変革的契機をはらむ

* 丸山教

富士講の一つである丸山講を背景に明治初年に成立

困民党、貧民党の運動と絡まった世直しの性格のもの

◎ 丸山教の世直し思想

松方デフレ政策の下での生活の荒廃

→ 終末観的幻想にかきたてられる

↓

近代化に反対する反文明化の立場

明治政府、天皇までも批判される

神の道が失われ世直し必要

↓
国家神道＝天皇崇拜とは無縁

前近代の諸関係を復古主義立場で理想化

↓

思想の極度の幻想性→組織的に無統制

→ 天皇制イデオロギーに妥協、同化

唯心論的世界観に立ち人々に厳しく改心を求める

↓
大衆に対して宗教的呪術的

通俗道徳的自己規律をふまえ、具体的合理的に構想できたぶんだけ世直し観念

の宗教的性格は減少→無神論に近づく

他方、これに媒介されない呪術・宗教的性格の拡大

◎ 民衆の通俗道徳的な自己鍛錬が世直し観念の成熟の基礎

幕藩制社会の民衆意識

幕藩制社会の支配思想である「仁政」イデオロギーを受容しているが、意識

下では断念・諦めを隠している。… 日常

↓

農民の社会的不満や要求は通常、身分制支配の下から上へと順次にたどる訴願によって処理されるべきものであり、収奪の担当者たちの温情にすがって嘆願するのだからほとんど有効でありえない。

↓

結果として、怨恨・憤激は無意識のうちに増大してゆく

↓

百姓一揆

一般に、百姓一揆はその具体的諸要求から見れば、幕藩制社会の存在を自明の前提として、封建的諸負担の軽減を求めるものであり、その意味では反封建的なものではなく、幕藩制社会の日常意識に根ざした闘争だった。

しかし、具体的要求を非合法の暴力手段に強要するものであり、そうした闘争形態から見れば、幕藩制社会の秩序原理と対立している。… 幕藩

〔蜂起の意識〕

蜂起のきっかけ

* 多様な鬱屈した状況により民衆の緊張感が高まりささいなことでも蜂起するきっかけとなる。

* 民衆の具体的諸要求が抑圧され阻止されているとゆう状況から、抑圧の当事者や責任者に対する憤激や憎悪が鬱積されてゆき、そうした人物を許すべからざる悪役として指定し攻撃することで蜂起する。

→ これまで当該社会の公的空間に姿を現さないよう抑圧されてきた巨大なエネルギーを持った感情が、一揆という非日常的な形態で爆発。

多くの場合、民衆の攻撃対象は特権的豪農商等の特定の人物で、まれには藩権力そのものとなる時もあった。

↓

しかし、大衆の自然発生的活動性は、憎悪や怨恨を晴らすことでたちまち燃え尽きてしまい、自らの民衆的世界像を分立させ自立させることは困難になった。

* 蜂起に先立って、頭取を引き受けるものが出現することによって、幕藩制社会の権威主義的抑圧的原理が部分的に突破されて、民衆の方に公的価値と正統性が奪取された。

〔結集様式〕

* 百姓一揆への参加は村単位で、多くの場合参加強制がなされた。強制によって責任を他に預けることができ人々は容易に一揆に参加してゆくことができた。

* しかし、一揆による集団的高揚は長く持続せず、特定の悪役が除去されたものとしての幕藩制支配は容易に再受容され、集団は解体され、活動性の大部分をオオジーの満足に浪費して終焉した。

〔新たな可能意識〕

- * 開国を期に、幕藩制秩序の安定性と絶対性は急速にくずれていき、世直し一揆において、小生産者農民としての解放についての自意識を萌芽的にはあるが持ちはじめ、闘争は大規模で武力的になる。→明治絶対主義国家確立の道程を急がせる動因となる
- * 明治国家においては、かつての民衆願望は、近代化してゆく「日本帝国」のもとでの安穩と幸福の追求へと転換され、永い一揆の伝統とそこから生まれた可能意識とは、「殺身成仁」式の義民だけを残して、歴史の暗黒の部分に葬られてしまった。

＜この著書に対する評価＞

〔布川清司氏 書評『日本史研究』〕

* 安丸氏は、「近世中期以降、日本中の一般民衆がすべて通俗道徳を目的にした」という結論を出している。

「（安丸氏は）…時代差、地域差、階級差の点で厳密に腑分けしなかった…。資本主義の形成期、特に近世中後期を想定している。確かにこのことは資本主義の形成期という限りで妥当するが、論旨を元禄期の河内屋可正からときおこすために、…近世のあらからた時代を覆うような印象を醸成するものに与えやすい。

…確かに地域を先進地域の畿内に限定すれば、可正、梅岩の思想は元禄、享保の早い時期から受け入れられる基盤を持っていた…。しかし、それを一気に全国現象と見なし、しまう大胆な拡大が果たして可能であろうか。…（安丸氏の）思想的階層差への致命的な無関心さ…。…中層階級については案外に立証されていない…（安丸氏は）村方指導部からせいぜい上層部の立場に身を寄せて彼等の思想を即…彼等と利害の対立した中下層農民の思想にすり替えた…立場が違えば思想も変わるという思想的階層差に気づかなかった…。

* 安丸氏は「合法的訴願はほとんど有効ではない」と断定している。

⇕

「非合法法をの側面を強調したいがための作為…。（安丸氏の）論述には立論に不都合な研究成果を意図的に無視する傾向…。」

* 安丸氏は一般民衆が通俗道徳をたんに手段としてではなく、目的として実践したと主張している。

⇕

「…中下層については実証されていない。…一般民衆は通俗道徳の実践を何かの目的を達成するための手段と考えた場合のほうに圧倒的に多い。

〔沼田哲氏 書評『史学雑誌』〕

* 安丸氏の民衆像の曖昧さ…安丸氏が「通俗道徳」として共通の性格を持つとして「民衆思想」とは、…頂点的思想家やそれに近い者等（上層の人々）を通して「民衆思想」を把握している。

⇕

「同じ“民衆”という立場にもその内部における階層的な矛盾、対立の存在は“民衆思想”を考察する場合に無視し得ない重要な前提である。…（しかし）安丸氏においてはこのことについての考慮が十分ではない。…少なくとも民衆は思想的に等質であると考えられている…。」

* 安丸氏は没落（努力したのに関わらず）の結果自らを「思想的道徳的にも敗北し自己形成、自己規律の努力も諦観やニヒリズムや秘やかな怨恨へと転化していった」といっている。

⇕

「…彼等こそは自らの体験を通して“通俗道徳”の虚偽性を痛切に実感させられ、…“仁政”イデオロギーの枠内におさまりきれず、一揆や打ちこわし、“世直し”の意識につながるものが“日常”においてすら生まれてきた…。一揆はどのような日常における意識の集中的表現であつたと考えることができるならば、必ずしも日常一非日常、静一動というような対比として一揆の意識を分析する方法をとらずとも、氏が例えば“民衆闘争が民衆の日常的生活欲求のたんなる延長にあるものではなくはげしく感動的な人間変革の過程にほかならない”と強調することは可能であつた…。氏の方法論としての“日常”と“非日常”との対比は一揆の意識の中の可能性を強調するために、いさか過度に行われている…。」

* 安丸氏は（第二編において）幕末世直し一揆の中に「小生産者農民としての自由と目立こそが可能意識の方向」であり、その小生産者の可能意識は未成熟であつたと論じ、それは第一編における日本における有力な宗教的異端の欠如や政治的権威からの自由を保障しようとするような性格を欠くことなどの幕藩制社会における宗教的特色に関する指摘と結びつけて考察している。

⇕

「…この二つのことが第一編と第二編での扱い方において必ずしも整合的でない…。（第一編では）…民衆意識の中で変革的な意識がいかに形成され難いか、…（第二編では）未成熟ではあるが民衆意識の中における変革の意識が小生産者の論理としてあらわれている。」

〔小沢浩氏 「民衆宗教史研究の課題—安丸良夫『近代天皇像の形成』を中心に—」
歴史学研究〕

「…通俗道徳では一般化できない。…その論拠を地域差、階層差に求める点で、宮城氏の批判も布川氏のそれと軌を一にしたものである…。このような批判はどの外れの批判…」

「まず階層の問題については、事実の問題としても、安丸氏はこのような通俗道徳の実践による主体形成の思想の直接の担い手がいかなる階層の人たちであつたかという点を、絶えず明らかにされているし、なによりも、マルクス主義の支配的な学界に身をおき、自らもマルクス主義によって思想史の方法を研鑽されてきた（と思われる）氏にして、階層差や地域差の問題を単純に無視していると考えたとすれば、考える人の頭の方がよほど単純だ…。」

「宗教が宗教として果たした役割」

「…自己を強ちに呪縛する宗教意識の何らかの変革を伴わないでは、…主体形成も自己変革解放もあり得なかつた…新たな宗教意識の展開が、事実あつた…。安丸氏は…通俗道徳に…視野が限定（丸山教に關しても）…丸山教の神秘的呪術的な側面をどう説明するのか」

「個人生活の次元では無神論に近いが社会体制全体の問題としては宗教的、呪術的たらざるをえないという説明は、宗教意識というものをあらゆる社会意識と不可分のものと捉える私の立場からすれば…納得のいかない…。」

「人間の心こそ神だ、神とはじつは人間の心だ」という意識は「信心を人間の内面のもんとする」ということと、ある意味で対応するもの。無神論化などという段階をこの時代の民衆意識に求めるのは無謀。

<安丸氏の位置>

今までのマルクス主義の階級闘争史の立場からの研究から一転し、従来の歴史学の基本的な枠組みの有効性を認めつつも、その方法的射程に留保をつけ、民衆という深部で暗転していく部分的なものを焦点としてとらえ、独自の立場で近代民衆思想史を研究するものであつた。その意味では民衆思想史の研究において重要な意義を担うものになつた。

<感想>

今回の安丸氏の考えは今まで私たちが触れることのなかつた立場からの見方であつたので、とても新鮮に感じた。しかし一方でこうした新たな考えのために二週間という短い期間で深く読みこむとゆうことはかなり難しかった。

<参考文献>

- 『近代天皇像の形成』安丸良夫 岩波書店 1992
 『近世思想論 講座日本近世史9』本郷隆盛・深谷克己編 有斐閣 1981
 「百姓一揆の思想」深谷克己（『思想』1973.2）
 「変革期の思想」宮城公子（『日本史研究』111号 1970）
 書評 布川清司『日本史研究』149号 1974
 書評 沼田哲『史学雑誌』第85編1号 1976
 「民衆宗教史研究の課題」小沢浩（『史学研究』434号 1976）

(3) レポート(小論文・論文)の書き方

1. レポート(小論文・論文)について

文学部の学習・研究の集大成は、いうまでもなく4回生12月に提出される卒業論文にあります。卒業論文では、自分の設定したテーマに基づき、その検討のために必要となる史料を全て蒐集・分析し、さらにそのテーマに関する文献・論文を全て渉猟して論点・問題点を摘出し、独創性に富む学術的価値のある論文の作成が求められています。また、枚数も本文で400字詰原稿用紙30枚以上50枚以内、註を加えると100枚前後に及ぶことになります。このため、1回生のうちから、切磋琢磨して多くの文章を論理的かつ学術的に書く訓練を積む必要があります。

研究入門でも、通例は夏季・冬季に10枚前後のレポートが課されます。また、概説や史料講読、特殊講義、2・3回生の基礎講読・演習などでも、それぞれボリュームのあるレポートが課されることが珍しくありません。これらは、全て卒業論文作成のための予行演習と位置づけられていますから、可能な限り論文形式の文章で書く必要があります。**他人の見解を出典を示さずに丸写ししたり(剽窃)、あるいは自分で確かめていない史料を他人の著作から抜き出してくること(孫引き)は、直ちに落第(F評価)の対象となります。**したがって、1回生のうちから他人の見解と自分の見解を厳格に区分して文章を書くことが求められます。

2. レポートのテーマの設定

多くの場合は、研究入門のレポートの論題は担当教員によって指定されています。ただし、その場合も「前期に取り上げたテーマから一つを選んで自由に論じよ」といった具合に、かなりの程度自分たち自身でテーマを決めなければなりません。どのようにテーマを決定するかは、各自の興味、関心次第ということになりますが、テーマをできるだけ広い視点から考えるためには、できるだけ1回生の内に多くの通史を読んでおくことをお勧めします。高校時代よりは踏み込んで記述してある一般向け通史としては、以下のものに定評があります。

- 『日本の歴史』全26巻(中央公論社[中公文庫]、一九六五～六七年)
- 『日本の歴史』全33巻(小学館、一九七三～七七年)
- 『日本民衆の歴史』(三省堂、一九七五～七六年)
- 『日本通史』全3巻(山川出版社、一九八六～八七年)
- 『大系日本の歴史』全15巻(小学館[小学館文庫]、一九八七～八九年)
- 『日本の歴史』全22巻(集英社、一九九一～九三年)
- 『週刊朝日百科日本の歴史』全133巻・別巻10(朝日新聞社、一九八六～九〇年)
- 『日本の歴史』全26巻(講談社、二〇〇〇～〇三年)

また、少し専門的にはなりますが、以下のものが現在までの日本史研究上の通説、研究史、課題などを知るためには基本シリーズといえます。

- 『岩波講座日本歴史』全23巻(旧版、岩波書店、一九六二～六四年)
- 『講座日本史』全10巻(東京大学出版会、一九七〇～七一年)
- 『シンポジウム日本歴史』全23巻(学生社、一九七一～七三年)
- 『歴史科学大系』全34巻(校倉書房、一九七二年～刊行中)
- 『岩波講座日本歴史』全26巻(新版、岩波書店、一九七五～七七年)
- 『講座日本歴史』全13巻(東京大学出版会、一九八四～八五年)
- 『日本歴史大系』全6巻(山川出版社、一九八四～九〇年)
- 『岩波講座日本通史』全25巻(岩波書店、一九九三～九六年)
- 『新視点日本の歴史』全7巻(新人物往来社、一九九三年)
- 『日本史講座』全13巻(東京大学出版会、二〇〇四年～刊行中)

さらに、山川出版社の『～県の歴史』(新版が刊行中、旧版は完了)、吉川弘文館の『人物叢書』(刊行中)などは、地方史や歴史的人物を理解する上では基本文献であり、自分自身の出身地、興味を抱いていた人物などを中心に、順次読み進めることが望ましいでしょう。

これらは大部のものが多く、計画を立てて(文庫であれば一週間に一冊とか)読破していくことをお勧めします。こうした通史に裏打ちされるならば、レポートのテーマ設定は、はるかに容易になりますし、何よりも研究史・研究状況を前提として日本史を捉える眼が養われます。

また、どのようなテーマを設定するにせよ、自分自身の問題関心を不断に見つめることが、一つのテーマからさらにさまざまテーマへと自分の興味を膨らませていくためにもきわめて重要なことがらです。何故、自分がこのテ

テーマを考えついたのかについて、単に思いつきということではまず、じっくりと振り返って検討することで、現在の自分の関心・こだわりや問題意識を明確にするように努めてほしいと思います。必ずや、自分の研究テーマは一段と広がりをもってくるはずです。

3. レポートの書き方

レポートの書き方にこれといったマニュアルはありません。ただし、一般的にはテーマが決まれば、次のような作業をする必要があります。

- ①テーマに関わる文献リストの作成。最初は、文献リストを載せた『日本古代史研究事典』『日本中世史研究事典』『日本近世史研究事典』『日本近現代史研究事典』（いずれも東京堂出版）や『日本歴史学界の回顧と展望』（山川出版社、一九八七～八八年）、あるいは『日本史研究事典』（集英社版『日本の歴史』所収、前掲）、『日本史論文の書き方』（吉川弘文館、一九九二年）、『岩波講座日本通史別巻1』（岩波書店、前掲）などを見るのが便利です。ただし、これらは他人が作成した文献リストであり、重要文献が漏れている場合や自分自身の関心分野について丁寧に書いていない場合もあります。そうした場合には、これらの文献リストから想定される重要文献を先ず一冊は入手する必要があります。重要文献に付された註や巻末参考文献一覧などを参照することで、自分自身の文献リストを作成することができます。また、もう少し専門的に調べたい場合には、毎年四回国立国会図書館から刊行されている『雑誌記事索引』（人文科学編）を図書館で検索してみてください（パソコンでも検索できます）。時間はかかりますが、詳細な論文リストを作成することができます。この他、最近は多くの文献リストがジャンル別・地域別に刊行されていますので図書館のレファレンスカウンターの周辺を「探検」してみてください。また、インターネットでも、さまざまな文献リストを検索することができますが、これについては情報処理の授業で詳しく学ぶと思いますので省略します。
- ②テーマに関する文献・論文を蒐集し、精読する。リストができたら、著書についてはランナーズ（立命館大学図書館蔵書検索システム）で検索し、また論文については各図書館・資料館の『所蔵雑誌分類目録』で検索します（インターネットでも検索できます）。所在場所が分かったら、図書を借りだし、あるいは論文をコピーするなどして、精読の準備を進めます。この際に、できるだけ刊行年の新しいものから精読していくとよいでしょう。最新の研究成果や研究状況が分かるだけでなく、新しいものにはそれ以前の文献・論文リストが註記されていますから、それ以前に発表された文献を知ることができます。なお、できるだけメモをとりながら（パソコン・ワープロに向かいながら）精読することをお勧めします。とくに重要文献や重要史料などは、その出版社、刊行年、所蔵機関などを必ず記録しておくようにしてください。レポート作成やこの後の研究に役立つことになるからです。
- ③史料を蒐集する。テーマに関する文献・論文を精読していく内に、それらが歴史学研究・日本史研究の論文である以上、どのような史料に基づいて立論されているかが理解されてきます。次に重要なのは、これらの史料をできるだけ蒐集し、実際に目を通してみることです。無論、未刊行史料、原文書に基づいて論じられているものも多いので、それらを蒐集・コピーすることは容易ではありません。その際は、せめて所蔵機関などについては留意しておきましょう。1回生の内は、活字として刊行されている史料について、とくに立命館大学で閲覧できるものはできるだけ蒐集・読解したいものです。史料を自分自身で分析してレポートを書くことは、1回生にはまだ難しいと思いますが、少なくとも常に史料に立ち返って考えてみる訓練にはなると思います。
- ④レポートを書く際の注意。上記の作業を経て、じっくり構想し、いよいよレポートの執筆となりますが、ここでは、執筆に際しての細かな注意を記しておきます。なお、小集団クラスのレポートについては、卒業論文の書式に準じて書くことが求められています（後述⑧ 卒業論文・卒業レポートの作成について参照）。

[手書き・ワープロ]

手書き・ワープロともに可です。手書きの場合はA4版400字詰原稿用紙、ワープロの場合はA4版に40字×30行で印字してください。レポートの表紙は事務室で受理し、必要事項を書き込んでください。

[縦書き・横書き]

卒業論文では、日本史コースは縦書き、考古学コースでは横書きで書くことになっていますので、各自の進路に合わせて考えたらよいと思います。原則的に文献史学では縦書き、考古学では横書きで提出して下さい。

[章立て]

序文にテーマ設定の理由、問題の所在、研究状況などを記します。

第一章第一節第一項・・・・・・・・・・第三章第三節第三項など。

最後に結論として、新たに得られた知見、問題点、今後の課題を記します。この後に、註記、参考文献などが続きます。

[文体]

「～である」「～であった」を用い、「です」「ます」体は避けます。

[文字・仮名遣い]

地の文は、常用漢字（当用漢字）・現代仮名遣いを用います。引用文は、原仮名遣いを尊重し、引用史料の旧漢字・異字体・変体仮名遣いなどについては、原則的に尊重するようにします。また、漢文史料については、勝手に読み下し文にせずに、原文と句読点・訓点などを付すようにします。句読点・「」（）も一字一マスをあてます。また、平出・闕字は省略可ですが、その場合は〔平出〕〔闕字〕と記すようにしてください。

[改行]

章節のはじめの書き出し、及び改行のときは一字下げて書き出します。

[引用・史料文]

引用・史料文は「」をつけ、註で出典・典拠を明示します。自分の文章に書き直したときにも必ず註で出典・典拠を示さなければなりません。長い引用文については、行を改め本文より全体を1～2字下げて書くようにします（この場合は「」は不要です）。なお、レポート（論文）中の研究者の名前は敬称を省略してもよいことになっています。「～氏」は使用してもいいですが、「～先生」「～教授」などは用いないことになっています。

[註]

註は本文の該当個所に①②などの番号をつけ、レポート（論文）の最後にまとめて番号を再掲して、そこに註記します。

[図表・地図]

もし必要な場合は、適当な用紙を使って、レポートに貼付したり折り込んだりしてください（考古学では図版別冊として提出することが求められています）。

[推敲]

レポートを書き上げたら、必ず推敲してください。誤字・脱字、主述関係の一致、接続詞の適否、史料引用の正確さなどは必ずチェックするようにしましょう。

(4) 参考書・辞書類について

以下には、日本史研究上の基本的な参考書・辞書類について、とくに1回生にとって有益と思われるものを掲げておきます。なお、考古学研究上の基本的な参考書・辞書類については、別途配布します。

1. 購入して座右においておくことが望ましいもの

[辞書類]

『新版角川日本史辞典』（角川書店、一九九六年）

その他に、国語辞典、漢和辞典は使い慣れているもので結構ですから、必ず備えておいて下さい。また、古文書解読のための『くずし字解読辞典』（東京堂出版、一九八三年）などが必要になる場合があります。

[年表]

『日本史年表』（岩波書店、第四版は二〇〇一年）

2. しばしば用いることになるとされる辞書類

『国史大辞典』全15巻（吉川弘文館、一九七九～九七年）

『日本史広辞典』（山川出版社、一九九七年）

『朝日日本歴史人物事典』（朝日新聞社、一九九四年）

『コンサイス日本人名事典』（三省堂、改訂版一九九〇年）

『日本国語大辞典』全10巻（小学館、一九七二～七六年）

諸橋轍次『大漢和辞典』全15巻（大修館書店）

『読史備要』（講談社、一九三三年）など。

3. こんなときには、こんな辞書類（目録類）が

①歴史的人物についてもっと詳しく調べたい。

『角川日本姓氏歴史人物大辞典』全47巻（角川書店、一九九一年～刊行中）

『国書人名辞典』全5巻（岩波書店、一九九三～九九年）など。

他に『日本仏教人名辞典』（法蔵館、一九九二年）、『日本女性人名辞典』（日本図書センター、一九九三年）『明治維新人名辞典』（吉川弘文館、一九八一年）など、ジャンル別のものが数多く刊行されていますので、図書館1Fで「探検」してみましょう。

また、歴史的人物の系図・官職などを知る上では、『尊卑分脈』全5巻（吉川弘文館『国史大系』所収）、『公卿補任』全6巻（同前）が役立ちます。

②歴史的人物に対してどのような研究が行われてきたかが知りたい。

『日本人物文献目録』（平凡社、一九七四年）など。

ただし、これはやはり自分でコツコツと調べた方が確実です。

③日本史に登場する地名について詳しく知りたい。

『角川日本地名大辞典』全50巻（角川書店、一九七八～九〇年）など。

④日本の宗教・思想関係について調べたい。

『日本宗教事典』（弘文堂、一九八五年）

『岩波仏教辞典（第二版）』（岩波書店、二〇〇二年）

『日本仏教史辞典』（吉川弘文館、一九九九年）

『神道事典』（弘文堂、一九九四年）

『日本思想史辞典』（ぺりかん社、二〇〇一年）

『岩波哲学・思想辞典』（岩波書店、一九九八年）など。

⑤日本史上の芸能・民俗関係について調べたい。

『日本民俗事典』（弘文堂、一九七二年）

『演劇百科大事典』全6巻（平凡社、一九八六年復刻）

『日本美術史事典』（平凡社、一九八七年）

『角川茶道大事典』（角川書店、一九九〇年）

『有職故実大辞典』（吉川弘文館、一九九六年）など。

⑥史料の所在、刊行状況が知りたい。

『国書総目録』全9巻（岩波書店、一九六三～七六年）

『古典籍総合目録』全3巻（岩波書店、一九九〇年）

『史料編纂所図書目録』全17巻（東京大学出版会、一九五五年～刊行中）

『日本史資料総覧』（東京書籍、一九八六年）

『史料館所蔵史料総覧』（名著出版、一九九六年）

『歴史資料保存機関総覧』全2巻（山川出版社、増訂改訂一九九〇年）など。

古文書類などは、各所蔵機関が刊行している目録で検索することが必要です。

⑦刊行史料についてどのようなものなのか知りたい。

『群書解題』（続群書類従完成会、一九六〇～六七年）

『史籍解題』（平凡社、一九三六年）

『国史文献解題』全2巻（朝倉書店、一九六五年）

『史籍解題辞典』全2巻（東京堂出版、一九八五～八六年）など。

⑧さしあたり簡単に刊行されている基本史料を見るためには？

『古事類苑』全51巻（吉川弘文館、1967～71年復刻）

『大日本史料』1～12編（既刊317冊）（東京大学出版会、刊行年は多岐にわたるため省略します。以下同種のものは省略してあります）

『大日本古文書』既刊181冊（東京大学出版会）

『皇室制度史料』既刊14巻（吉川弘文館、一九七八～九一年）

『史料総覧』（東京大学出版会、一九六四～六六年）

『年表日本歴史』全6巻（筑摩書房、一九八〇～九三年）

『日本史籍協会叢書』全192巻・続全100巻（東京大学出版会）
『現代史資料』全46巻・続既刊12巻（みすず書房）
『新訂増補国史大系』シリーズ（吉川弘文館）
『日本思想大系』全67巻（岩波書店）
『日本近代思想大系』全24巻（岩波書店、一九八八～九二年）など。

ただし、日本史の万能の史料集というものは存在していません。このことは、肝に銘じておいて下さい。現在、岩波書店から最も基本的な史料を集めて刊行が進められていますが（『日本史史料』全5巻、既刊は中世・近代・現代）、大学での研究を進める上では不十分なものです。これらは、あくまで研究の出発点として活用してください。

⑨ジャンル別の年表には、どんなものがあるのか知りたい。

『日本文化総合年表』（岩波書店、一九九〇年）
『近代日本総合年表』（岩波書店、三訂版一九九一年）
『仏教史年表』（法蔵館、一九七九年）
『日本文学大年表』（桜楓社、一九八六年）
『日本美術史年表』（座右宝、一九七二年）
『日本演劇史年表』（八木書店、一九九八年）
『対外関係史総合年表』（吉川弘文館、一九九九年）など。

4. その他、役に立つ目録類

『中世史ハンドブック』（近藤出版社、一九七二年）
『近世史ハンドブック』（近藤出版社、一九七三年）
『日本女性史研究文献目録』ⅠⅡⅢ（東京大学出版会、一九八三～九四年）
『全国市町村史刊行総覧』（名著出版、一九八九年）
『日本思想史文献解題』（角川書店、新版一九九二年）
『岩波日本史辞典』所載の「日本史備要」（岩波書店、一九九九年）
『地方史研究の新方法』（八木書店、二〇〇〇年）など。

5. 日本史研究上で重要な学術雑誌

『日本史研究』日本史研究会編、月刊
『歴史学研究』歴史学研究会編、月刊
『歴史評論』歴史科学協議会編、月刊
『日本歴史』日本歴史学会編、月刊
『史学雑誌』史学会編、月刊
『思想』岩波書店、月刊
『地方史研究』地方史研究会編、月刊
『史林』史学研究会編、隔月刊
『ヒストリア』大阪歴史学会編、季刊
『芸能史研究』芸能史研究会編、季刊
『仏教史研究』仏教史学会編、季刊
『新しい歴史学のために』京都民科歴史部会編、季刊
『考古学雑誌』日本考古学会編、季刊
『日本考古学』日本考古学協会編、半年刊
『考古学研究』考古学研究会編、季刊
『日本思想史学』日本思想史学会編、年刊など

その他、大学関係で多数の学術雑誌が刊行されています。人文系資料室などで自分で確かめてみましょう。立命館大学文学部でも『立命館文学』（隔月刊）を、史学科では『立命館史学』（年刊）を刊行しています。

6. 資料館・博物館に自分で出かけてみよう。

日本史研究では、自分で全国各地に出かけ、図書館・博物館・歴史資料館・教育委員会などが保管・所蔵している史料・資料・文献などを調査して閲覧し、複写・写真撮影を行うことが重要になります。以下に、もっとも基本的な施設を掲げておきます。

- ・国立国会図書館（東京都千代田区永田町1-10-1）
- ・国立公文書館（東京都千代田区北の丸公園3-2）
- ・東京大学史料編纂所（東京都文京区本郷7-3-1）
- ・京都市歴史資料館（上京区寺町通丸太町上ル松陰町138-1）
- ・京都府立総合資料館（左京区下鴨半木町1-4）
- ・陽明文庫（右京区宇多野上ノ谷町1-2）
- ・大阪府立中之島図書館（大阪市北区中之島1-2-10）
- ・天理図書館（天理市杣之内1050）など

(5) その他（図書館・人文系資料室・共同研究室・自主ゼミなどについて）

1. 図書館について

図書館の利用方法については、リテラシー入門で図書館ガイダンスがありますので、必ず参加して理解するようにしてください。また、『LIBRARY GUIDE』も参照してください。以下では、1回生の皆さんがよく利用するコーナーについてのみ簡単に解説しておきます。

- [1F] レファレンスカウンター 書庫にある本の貸出申請、資料の所蔵調査、他大学・機関所蔵図書・資料の閲覧のための紹介状の発行、資料取り寄せ依頼などを行ってもらいます。また、このカウンターの西側には諸辞書・書誌類、東側には諸目録・索引などがあります。
- [2F] 社会科学系の著書が中心ですが、新書・文庫はここに 있습니다。また、社会科学系とはいっても、政治学（政治史）・経済学（経済史）、社会学（社会史）・女性学などいずれも日本史研究と深く関係している蔵書がありますので、注意が必要です。
- [3F] 日本史関係の蔵書は、最も東側近くの210番台近辺です。

2. 人文系資料室（文系資料室）について

清心館東側の修学館西側地下1階にあります。利用可能時間は月曜日～金曜日は9:00～20:00です。土日祝日、毎月15日（書庫整理日）は休館です。カウンターに3ヶ月ごとの予定表が置いてありますので、詳しくはそれを利用してください。

この資料室には、ランナーズで「所在 文・文献〇〇」と書いてある蔵書・雑誌などがあります。日本史研究のための基本史料、古典、各大学の研究紀要、日本史研究関係の雑誌のほとんどがそろっています。ここでは、学生諸君は本を借りだすことはできませんので、資料室で閲覧し、必要箇所はコピーするようにします。なお、資料室内には辞書以外の本やカバンを持ち込めませんので、筆記用具・貴重品のみ所持し、修学館1階西側入り口のロッカーに手荷物などを保管・施錠した上で入室してください。

3. 共同研究室について

学生諸君の自主的学習・研究の場として日本史学専攻には、啓明館1Fに共同研究室（略称共研）があります。この部屋は、学生諸君のために開放されており、学習会や自習のためにだれでも自由に利用することができます。

共同研究室には、たいていは助手・TAがつめていますので授業時間は原則的に開放されています。もし閉鎖されている場合は、部屋を開けるための鍵が必要です。鍵は文学部事務室にありますので、自分の学生証と引き替えに鍵を受け取り、貸出帳に学生番号と名前、日時を記入してください。また、自主ゼミなどの団体が定期的に利用している時間帯があります。それについては、共同研究室内の黒板に記してありますので、計画的に利用してください。

部屋を出るときは、必ず施錠してください。部屋が空いたままにならないように注意してください。また、一時外出するときでも、部屋にだれもいなくなるときは必ず施錠していったん事務室に鍵を返却してください。退出する際には、戸締まりを確認し、消灯・パソコンの電源切断を行ってから退出するようにしてください。鍵を返却するときは、事務室の貸出帳に返却時間を記入し忘れずに学生証を受け取ってください。

共同研究室には、基本的な辞書・参考書類がおいてあります。いうまでもなく、これらは全ての学生諸君のために備えられているものですから、大切に取り扱いってください。また、貸しだし禁止となっていますので、部屋の中で利用するようにしましょう。

共同研究室内には、Windowsのパソコンが2台備え付けられています。基本的なソフトが入っていますので、レジュメ作成などに利用することができます。また、インターネットでの検索もすることができます。ただし、多くの学生諸君が利用できるように、原則的にメール交換などは行わないようにしてください。部屋の中に、パソコン利用規程が備え付けられていますので、詳しくはそれを参照して正しく利用するようにしてください。

4. 日本史学専攻ホームページについて

日本史学専攻では、ホームページを開設しています。専攻の沿革、教学理念、講義時間割、教員・院生紹介などのページがあります。また、この「栞」も適時見ることができます。適時更新されていますので、随時参照してください。とくに教室ニュースでは、掲示板に掲示された事務室の日本史関係の連絡なども載せるようにしています。活用してください。

アドレス <http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/jh/>

5. 自主ゼミについて

自主ゼミとは、学生諸君が自分たち自身で学びたい方向を定め、同じ方向に進む仲間を募り、ともに研鑽しあうという趣旨のもと、自主的に組織されたゼミのことです。自主ゼミは、学術性・専門性にとみ、互いに切磋琢磨しながら研究の水準の向上を目指し、また同輩や先輩、後輩との交流の中で多くのものが得られる場になっています。研究入門での学びをより確かなものにするために、これらの自主ゼミに積極的に参加することをお勧めします。また、自分たちで新たに結成することも可能です。詳しくは、助手・TAに相談してみてください。現在以下のような自主ゼミがありますが、詳細は「本年度版新歓パンフレット」を参照してください。

- ① 古墳時代勉強会
- ② 古代史研究会
- ③ 中世史料研究会
- ④ 町触れ研究会
- ⑤ 幕末・維新史研究会
- ⑥ 日本思想史研究会
- ⑦ 現代をふまえ、問い、議論する知的興味の会
- ⑧ 世界考古学研究会

9 卒業論文・卒業レポートの作成と提出について — 4回生以上必読 —

日本史学専攻「卒業論文」の体裁について

	日本史学コース	考古学コース
原稿用紙に手書きする場合	A 4 判400字詰原稿用紙（横長）	A 4 判400字詰原稿用紙（縦長）
縦書・横書の指定	縦書	横書
枚 数	30枚以上50枚以下	
その他の注意	黒ペンを使用すること。	
ワープロを使う場合	A4判白紙（横長）	A4判白紙（縦長）
縦書・横書の指定	縦書	横書
文字数に関する指定	1行あたりの文字数：40字 1項あたりの行数：30行	1行あたりの文字数：40字 1頁あたりの行数：30行
分量等に関する指定	12,000字以上20,000字以下	12,000字以上20,000字以下
その他の注意		
表紙等に関する体裁	硬版（黒色）表と裏に硬版を使い綴じ紐で綴じること。	
大きさ	A 4	
綴じ辺	短辺綴じ（右辺綴じ）	長辺綴じ（左辺綴じ）
題目シール	所定のものを貼付	

明らかに「演習Ⅱ」の単位を認定される見込みのない学生（出席・報告していない学生）は、卒論を提出する資格がありません。題目提出前に、必ず、「卒業論文・演習Ⅱ」の担当教員の指導を受けて下さい。

（1）論文作成の準備

1 テーマの選定

テーマは論文の出発点であると同時に帰着点でもある。いかに多くの史料を漁り労力を費しても、明確な問題意識によって定められたテーマをもたないかぎり、良い論文はできない。

2. 研究整理と史料

テーマに関連する研究がどこまで進み、何が問題として残されているかを知るために、研究史の整理はたんねんにやらねばならない。次には史料の有無の点検が必要である。いかに問題意識が鋭くても、史料がないか、あっても利用できなければ、歴史学の論文にはならない。

3. 史料の蒐集

史料の蒐集は徹底的・網羅的に行うことが大切である。史料はできるだけ原文・原史料にあたり、原史料にあたり難い古文書・古記録の場合は、写真や影写本によるか、あるいはもっとも信頼のおける刊本を選ばなければならない。他の論文等に引用されているものをそのまま利用する、いわゆる孫引きは、誤読・誤解のもとであり、必ず

原典に遡って検討を加えなければならない。

(2) 論文叙述について

1. 論文構成

史料を集め、研究がある程度進んだ段階で、論文の構成を考える。論文構成（章節立て）にはいろいろ型があるが、基本的には序論・本論・結論の三つの部分から成る。序章では問題の所在を明らかにし、どういう角度からどのような方法で追究するかを記す。本論では分析・実証を行い、結論は序論と対応しながら全体として明らかにした点を要約し、できれば展望を記す。論文構成が新たな史料や研究によって変更を余儀なくされることは、誰もがすばしば経験することであって、あきらめずに何度も構成しなおす根気と努力が必要である。

2. 論文執筆

執筆にあたって大切なことは、自分の主張点を理解させるに十分明確な論理のはこびを工夫することと、學術用語は意味を的確につかみ、あいまいな用語を決して使わないことである。註記もなく他人の文章をそのまま持ち込むようなことは論外であり（これを剽窃という）、何よりも自分の文章（考え、ことば）で書かなければならない。

(3) 論文叙述と原稿用紙記載上の注意（考古学コースについては次項に定める）

1. 論文の枚数と用紙

論文は、手書きの場合、本文30枚以上50枚以内（400字原稿用紙）とする。ワープロの場合、本文12,000字以上20,000字以下（1ページあたり40字×30行）とする。

本文は縦書きとし、A4判400字詰原稿用紙を横長右とじにして用いること。二つ折りは不可。なお表紙はA4版黒色硬質ファイルを用いること。手書き・ワープロ共に可。

2. 文 体

「である」「であった」を用い、「です」「ます」調は不可。

3 文字・仮名遣い

地の文（本人の文章）は常用漢字ほか現用漢字、現代仮名遣いでよいが、引用文は原仮名遣いを尊重する。引用文・史料における旧漢字・異体字・変体仮名の扱いについては、時代や史料の性格によって異なるので、各ゼミでの指導方針に従うこと。漢文史料は軽々しく読み下し文には改めない（原文に句読点・訓点をつければよい）。句読点や「」（ ）も一字一マスをあて、誤字・脱字に注意して丁寧に記すこと。行間への書き入れなどはしない。

4. 段 落

論文構成にしたがって必ず章節を立て、章節の題名を記すこと。表示は一・二・三……でもよい。

5. 改 行

章節のはじめの書き出し、および改行のときは一字下げて書きはじめること。

6. 史料・引用文

史料や引用文は「」をつけ、註で出典・典拠を明示する。自分の文章に書き直したときも、必ず註で拠点を示すこと。長い引用文は行を改め、本文より全体を1～2字下げて書くこと。この時は「」は不要。

7. 註

註は本文の当該箇所へ12などの番号をつけ、論文の最後にまとめて番号を再掲し、そこに註記する。章節ごとに区切らず一連番号にすること。出典を出すときは、著者・書名（雑誌名）・ページ・発行年月（巻数号数）・発行所などを明記する。なお、註および補註は枚数・分量制限のなかに入らない。

8. 図表・地図

適当な用紙を使ってよいが、所定の論文用紙に貼付したり折り込む処理をする。

転載したものに関しては、出典、ページ数を明記すること。

9. 目 次

表紙の次の1枚(=ページ)に論題・学生番号・氏名などを再掲し、その次に(必要ならさらに1枚を加えて)章節の題名および各章節のページ数を記入した目次を必ずつけること。

10. ページ数

本文各ページの左肩に打つ。50枚の論文ならばページ数は50になる。

11. 参考文献

一括して付載・連記する必要はない。参照した文献は註にその都度明記すること。

12. 試問に向けての心構え

卒論は1月末～2月中旬頃に口頭試問を行い厳正に審査する。試問日は別途掲示するので注意すること。なお、論文は試問終了時に返却するが、予めコピーをとっておき、他の参考資・史料とともに試問の際に持参すること。

<考古学関係の卒業論文は次の規定による>

(手書きの場合)

1. 論文枚数と用紙

論文は、本文30枚以上50枚以内(400字原稿用紙)とする。

本文は横書きとし、A4判400字詰原稿用紙を縦置きにして用いること。表紙はA4判で縦置き・左綴じのもの(黒色)を用い、所定の用紙を貼り付けること。

2. 記載上の注意

記載上の注意は、前項2～7の規定にしたがうこと。

3. 目次

表紙の次の1枚(=ページ)に論題・学生番号・氏名などを再掲し、その次(のページ)に章節の題名および各章節のページ数を記入した目次を必ずつけること。

4. ページ数

本文各ページの右上に打つこと。

5. 図や表

図や表は図版別冊として一括にすること。

6. 図版の記載上の注意

- ①図版の大きさはB4判とする。
- ②用紙は縦長・横長どちらに使ってもよい。
- ③図は原則として、トレーシング・ペーパーに製図し、台紙にはりつける。拓本の場合は縮小コピーをかけたものでもよい。
- ④図版(PL)番号は右下につけること。
- ⑤表紙の次に図版目次を必ずつけること。

7. 試問に向けての心構え

前項12と同じ。

(ワープロ使用の場合)

1. 論文枚数と用紙

論文は、本文12,000字以上20,000字以下（1 ページあたり40字×30行で印字されたA4判用紙）とする。

本文は横書きとし、A4判の白紙（感熱紙は不可）を縦置きにして用い、40字×30行の書式で用紙の片面に印字すること。なお表紙はA4判で縦置き・左綴じのものをを用い（黒色）、所定の用紙を貼り付けること。

2. 記載上の注意

新しい章に入るときは、前章との間に1行あけること。それ以外ではむやみに行をあけないこと。全般的な記載上の注意は、前項2～7の規定にしたがうこと。

3. 目次

(手書きの場合)と同じ。

4. ページ数

本文各ページの中央下に打つこと。

5. 図や表

(手書きの場合)と同じ。

6. 図版の記載上の注意

(手書きの場合)と同じ。

7. 試問に向けての心構え

前項12と同じ。

「卒業論文」の提出について

◆「2005年度卒業論文」の提出締切期限は、

12月20日(火)午後5時とします。＜時間厳守＞

- ※ 提出の際は、学生証が必要です。
- ※ 必ず本人が持参してください。事前許可なしで代理提出はできません。
- ※ 締切時間は厳守してください。遅延提出は一切認められません。
- ※ 卒業論文の提出の形式が整っていないと受理できないケースもありますので、万端に準備してください。
- ※ **単なる体調不良や交通機関の延着・機器等の故障・勤務の都合等の理由での提出遅延は、認められません。**余裕を持って提出できるように心がけてください。
- ※ 予測不可能かつ緊急の事態などで、どうしても締め切り前の提出が困難になった場合、**自分で判断せず、必ず事前に文学部事務室に一報**してください。事前連絡・相談があったケースに関してのみ、本人申請書・証明書類を提出の上、教授会の審議を受けた上で提出の延期を許可する場合があります。（全てが許可されるとは限りません。）事前連絡と必要な書類手続の両方が満たされていることが大前提です。事前の連絡がない場合は、事後の対応が不可能になります。

◇「卒業論文」の提出前に、「**卒業論文題目届**」を文学部事務室に提出することが必要です。「卒業論文題目届」の提出締め切り期限は、

10月6日(木)午後5時とします。

◆論文審査の主査・副査の発表は、**10月下旬から11月上旬**とします。各専攻・プログラム共同研究室掲示板に掲示します。

◇**口頭試問の日程は、1月下旬から2月中旬**に行います。個人別の日時は、1月中旬頃に各専攻・プログラム共同研究室掲示板に掲示します。

※ 卒業旅行の日程は、口頭試問を避けてください。

◆卒業論文の形式は、各専攻・プログラムにより異なりますが、以下の形式は共通ですので、必ず守ってください。

- ① 卒業論文は、添付資料なども含め、必ず**2部**提出してください。
- ② 表紙に論題、氏名、学生証番号などを記載してください。

2005年度卒業論文 「〇〇 (論題)」 学生証番号、氏名

- ③ 論題は、事務室に提出した「卒業論文題目届」と全く同一でなければなりません。卒業論文作成中に論題の変更が必要となれば、主査・副査の変更がないか必ず指導教員に確認した上で、事務室で論題変更の手続きを行ってください。テーマ自体が変わるなど、大きな変更は認められません。
- ④ 主査・副査の名前を記した紙（シールになっています）を、おもて表紙の裏側に貼り付けてください（2部とも）。「主査・副査シール」は文学部事務室で配付しています。主査・副査は10月下旬から11月上旬に共同研究の掲示板に掲示されていますので、早めに確認してください。
- ⑤ 体裁については各専攻の「教学の手引き」に従って作成してください。（専攻によっては体裁の変更指示もあるため、各専攻掲示を確認してください。）
 体裁については、各専攻で点検します。したがって、窓口・提出会場で受け付けられた論文でも、専攻で体裁上の不備が発見された場合は、口頭試問の時点でF評価となることがありますので、注意してください。

2005年度後期 卒業論文に関する日程

日 程	内 容
10月6日(木)午後5時まで	「卒業論文題目届」事務室提出締め切り
10月下旬～11月上旬	主査・副査発表（共同研究室掲示板）
11月28日(月)～12月5日(月)	題目変更期間
12月13日(火)	卒業論文受付開始
12月20日(火)午後5時まで	卒業論文提出締め切り <時間厳守>
1月中旬頃	口頭試問日程発表（共同研究室掲示板）
1月下旬～2月中旬	口頭試問実施

◎5回生以上の学生で、前期に卒業論文を提出する方の日程

日 程	内 容
4月28日(木)午後5時まで	「卒業論文題目届」事務室提出締め切り
7月1日(金)～7月8日(金)	題目変更期間
7月13日(水)	卒業論文受付開始
7月20日(水)午後5時まで	卒業論文提出締め切り <時間厳守>
7月下旬～8月	口頭試問はこの間に実施します。日程は7月下旬に各専攻・プログラムの共同研究室掲示板に掲示します。

テーマリサーチ型ゼミナールで卒業論文（非卒業論文形式含む）を提出するには

テーマリサーチ型ゼミナール受講学生の皆さんは、従来のような卒業論文提出の形態（卒論形式）もあり得ますが、クラスによっては、そこで制作する卒業論文は従来の専攻のような論文形態によらず、共同で成果物（本の出版等）を仕上げてこれを卒業論文とすることができるという形態（非卒論形式）も認められています。提出期日・提出先・提出方法については、卒論形式か非卒論形式かによって取り扱いが異なります。必ずクラス内で担当教員に、いずれの形式なのかを確認してから作成してください。※卒論形式・非卒論形式いずれの場合も「卒業論文・卒業制作テーマ届」（←卒論形式・非卒論形式共通）は全員提出してください。

「卒業論文・卒業制作テーマ届」事務室提出締め切り：10月6日（木）午後5時まで

テーマ届変更期間：11月28日（月）～12月5日（月）

体裁について

卒論形式で制作の場合	文書体裁	字数・書式・用紙の大きさなどはクラス担当者の指示に従うこと
	表紙等に関する体裁	題目、学生証番号、氏名を必ず記載すること
	その他注意	1. 学生本人のみの執筆による単著であること。共同執筆の類は該当しない。 2. 主査・副査の発表・口頭試問日程等は担当者の指示に従ってください 3. 提出締め切り等の詳細は「テーマリサーチ型ゼミナール・卒論形式で提出する方」を参照してください。
非卒論形式で制作の場合	文書・表紙体裁	体裁については全てクラス担当者の指示に従うこと
	その他注意	1. 制作物（成果物）の提出が不要の場合であっても卒業論文・卒業制作テーマ届を所定の期日までに文学部事務室へ提出してください。 2. 制作物（成果物）の提出が必要な場合、提出期日・提出先・提出方法などは担当教員の指示に従ってください。 3. 口頭試問に相当するものとして、「卒業制作発表会（仮）」を実施することがあります。実施日については、担当教員の指示に従ってください。

テーマリサーチ型ゼミナール「卒論形式」で提出をされる方の提出について

提出に際する諸注意は基本的に前述の「卒業論文」の提出についてに従ってください。ただし、以下点が異なりますので留意してください。

- ①TRSのばあい、「卒業論文題目届」ではなく、「卒業論文・卒業制作テーマ届」の提出が必要です。
- ②論文審査の主査・副査の発表日程は授業内にて指示します。
- ③口頭試問の日程は基本的に1月下旬～2月中旬に行う予定ですが、個人別の日時等は授業内にてお知らせしますので、クラス担当教員の指示に従ってください。文学部共同研究室掲示板に掲示することもあります。

日 程	内 容
10月6日(木) 午後5時まで	「卒業論文・卒業制作テーマ届」事務室提出締め切り
10月下旬～11月上旬	主査・副査発表（担当教員による指示）
11月28日(月)～12月5日(月)	題目変更期間
12月13日(火)	卒業論文受付開始
12月20日(火) 午後5時まで	卒業論文提出締め切り <時間厳守>
1月中旬頃	口頭試問日程発表（担当教員による指示）
1月下旬～2月中旬	口頭試問実施

◎5回生以上の学生で、前期に卒業論文を提出する方の日程

日 程	内 容
4月28日(木) 午後5時まで	「卒業論文・卒業制作テーマ届」事務室提出締め切り
7月1日(金)～7月8日(金)	題目変更期間
7月13日(水)	卒業論文受付開始
7月20日(水)午後5時まで	卒業論文提出締め切り <時間厳守>
7月下旬～8月	口頭試問はこの間に実施します。日程は各担当教員に確認してください。

§ 日本史学専攻（日本史コース・考古学コース）参考文献目録

◆概論・通史◆

- ・『考古学講座』（全34巻） 国史講習会・雄山閣 1928～31年
- ・『日本考古学講座』（全7巻） 藤田亮策・後藤守一・上原専禄監修 河出書房 1955～56年
- ・『日本の考古学』（全7巻） 杉原莊介他編 河出書房 1965～67年
- ・『新版考古学講座』（全11巻） 大場磐雄・内藤政恒・八幡一郎監修 雄山閣 1968～72年
- ・『日本考古学を学ぶ〔新版〕』（全3巻） 大塚初重・戸沢充則・佐原眞編 有斐閣 1988年
- ・『日本歴史考古学を学ぶ』（全3巻） 坂詰秀一・森郁夫編 有斐閣 1983年
- ・『岩波講座日本考古学』（全9巻） 近藤義郎他編 岩波書店 1985～86年
- ・『旧石器文化の研究』（全5巻） 麻生優・加藤晋平・藤本強編 雄山閣 1975～76年
- ・『縄文文化の研究』（全10巻） 加藤晋平・小林達雄・藤本強編 雄山閣 1981～84年
- ・『弥生文化の研究』（全10巻） 金関恕・佐原眞編 雄山閣 1985～89年
- ・『古墳時代の研究』（全13巻） 石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編 雄山閣 1990～93年
- ・『考古学による日本歴史』（全16巻） 大塚初重・白石太一郎・西谷正・町田章編 雄山閣 刊行中
- ・『日本考古学論集』（全10巻） 斎藤忠編 吉川弘文館 1986～87年
- ・『論争・学説 日本の考古学』（全7巻） 桜井清彦・坂詰秀一編 雄山閣 1986～89年
- ・『通論考古学』 濱田耕作 大鐙閣 1922年（復刻版 雄山閣 1984年）
- ・『考古学研究法』 O・モンテリウス著、濱田耕作訳 岡書院 1932年（復刻版 雄山閣 1984年）
- ・『日本考古学概説』 小林行雄 東京創元社 1951年
- ・『考古学とは何か』 V・G・チャイルド著、近藤義郎・木村祀子訳 岩波書店 1969年
- ・『考古学の方法』 V・G・チャイルド著、近藤義郎訳 河出書房 1964年
- ・『考古学研究入門』 H・J・エガース著、田中琢・佐原眞訳 岩波書店 1981年
- ・『考古学入門』 鈴木公雄 東京大学出版会 1988年
- ・『歴史科学としての考古学』 B・G・トリッガー著、菊池徹夫・岸上伸啓訳 雄山閣 1991年
- ・『考古学を考える』 藤本強 雄山閣 1994年
- ・『日本史総覧』（全9巻） 竹内理三・児玉幸多・小西四郎監修 新人物往来社 1983～86年
- ・『講座日本歴史』（全13巻） 歴史学研究会・日本史研究会編 東京大学出版会 1984～85年
- ・『岩波講座日本歴史』（全26巻） 朝尾直弘他編 岩波書店 1975～76年
- ・『日本の社会史』（全8巻） 朝尾直弘・網野善彦・山口啓二・吉田孝編 岩波書店 1986～88年
- ・『日本民衆の歴史』（全11巻） 門脇禎二・佐々木潤之助・藤原彰・甘粕健編 三省堂 1974～76年
- ・『日本史の基礎知識』 杉原莊介・黛弘道・羽下徳彦・金井圓他編 有斐閣 1974年
- ・『日本女性史研究文献目録』（Ⅰ・Ⅱ） 女性史総合研究会編 東京大学出版会 1983・88年
- ・『史学概論』 太田秀通 学生社 1965年
- ・『歴史学叙説』 永原慶二 東京大学出版会 1978年
- ・『歴史科学体系』（全34巻） 歴史科学協議会編 校倉書房 1972～82年
- ・『日本歴史大系』（全6巻） 井上光貞・永原慶二・児玉幸多・大久保利謙編 山川出版社 1984～1990年
- ・『講座日本荘園史』（全10巻） 網野善彦・石井進・稲垣泰彦・永原慶二編 吉川弘文館 刊行中

- ・『日本仏教史』（全10巻） 辻善之助 岩波書店 1969～70年
- ・『争点・日本の歴史』（全6巻） 鈴木公雄他編 新人物往来社 1990～91年
- ・『一揆』 青木美智男他編 東京大学出版会 1981年
- ・『日本女性史論集』 総合女性史研究会編 吉川弘文館 刊行中
- ・『講座・前近代の天皇』 石上英一他編 青木書店 1992～95年
- ・『岩波講座 日本通史』 朝尾直弘他編 岩波書店 1993～96年
- ・『岩波講座 天皇と主権について考える』 網野善彦他編 岩波書店 2002年
- ・『日本の時代史』 石上英一他編 吉川弘文館 2002年～

◆考古学◆

- ・『先史考古学論文集』（1・2） 山内清男 示人社 1997年
- ・『日本先史土器図譜』 山内清男 示人社 1997年
- ・『日本先史土器の縄紋』 山内清男 示人社 1997年
- ・『縄文時代の漁業』 渡辺誠 雄山閣 1973年
- ・『縄文時代の植物食』 渡辺誠 雄山閣 1975年
- ・『日本農耕社会の成立過程』 都出比呂志 岩波書店 1988年
- ・『前方後円墳の時代』 近藤義郎 岩波書店 1983年
- ・『日本考古学研究序説』 近藤義郎 岩波書店 1985年
- ・『古墳時代の研究』 小林行雄 青木書店 1961年
- ・『古代の技術』 小林行雄 塙書房 1962年
- ・『続古代の技術』 小林行雄 塙書房 1964年
- ・『古墳文化論考』 小林行雄 平凡社 1976年
- ・『古墳時代政治史序説』 川西宏幸 塙書房 1988年
- ・『須恵器大成』 田辺昭三 角川書店 1981年
- ・『論集終末期古墳』 森浩一編 塙書房 1973年
- ・『土器様式の成立とその背景』 西弘海 真陽社 1986年
- ・『中世土器研究序論』 橋本久和 真陽社 1995年

◆古 代◆

- ・『古代史研究の最前線』（全4巻） 雄山閣 1986～87年
- ・『東アジア世界における日本古代史講座』（全10巻） 井上光貞・西嶋定生・甘粕健・武田幸男編 学生社 1980年～84年
- ・『古代の日本』（全9巻） 竹内理三他編 角川書店 1970～71年
- ・『新版古代の日本』（全10巻） 坪井清足他編 角川書店 1991～93年
- ・『日本古代宮都の研究』 岸俊男 岩波書店 1988年
- ・『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』（上・中・下） 和田萃 塙書房 1995～96年
- ・『日本の古代国家』 石母田正 岩波書店 1971年
- ・『日本古代国家の研究』 井上光貞 岩波書店 1965年
- ・『日本古典の研究』（上・下） 津田左右吉 岩波書店 1948・50年
- ・『大化前代社会組織の研究』 平野邦雄 吉川弘文館 1969年
- ・『大化前代政治過程の研究』 平野邦雄 吉川弘文館 1985年
- ・『日本古代王権の形成』 原島礼二 校倉書房 1987年
- ・『日本古代王権形成史論』 山尾幸久 岩波書店 1983年
- ・『日本古代国家史研究』 原秀三郎 東京大学出版会 1980年
- ・『日本古代国家成立史論』 吉田晶 東京大学出版会 1973年
- ・『日本古代国家の形成と東アジア』 鬼頭清明 校倉書房 1976年
- ・『日本古代国家の成立』 直木孝次郎 社会思想社 1987年
- ・『日本古代国家論究』 上田正昭 塙書房 1968年

- ・『日本古代史の基礎的研究』（上・下） 坂本太郎 東京大学出版会 1964年
- ・『新版日本古代社会』 渡部義通 校倉書房 1981年
- ・『日本古代政治史研究』 岸俊男 塙書房 1966年
- ・『日本古代政治史論』 門脇禎二 塙書房 1981年
- ・『日本古代政治組織の研究』 八木充 塙書房 1986年
- ・『日本古代籍帳の研究』 岸俊男 塙書房 1973年
- ・『日本古代の国家と在地首長制』 大町健 校倉書房 1986年
- ・『日本古代の氏族と天皇』 直木孝次郎 塙書房 1964年
- ・『古代対外関係史の研究』 鈴木靖民 吉川弘文館 1985年
- ・『正倉院文書と木簡の研究』 東野治之 塙書房 1977年
- ・『初期荘園史の研究』 藤井一二 塙書房 1986年
- ・『奈良朝の政治と民衆』 北山茂夫 校倉書房 1982年
- ・『日本古代官僚制の研究』 早川庄八 岩波書店 1986年
- ・『日本古代共同体の研究』 門脇禎二 東京大学出版会 1960年
- ・『日本古代氏族の研究』 佐伯有清 吉川弘文館 1985年
- ・『日本古代社会構想史論』 吉田晶 塙書房 1968年
- ・『日本古代籍帳制度論』 平田耿二 吉川弘文館 1986年
- ・『日本古代の氏の構造』 義江明子 吉川弘文館 1986年
- ・『律令国家成立過程の研究』 八木充 塙書房 1968年
- ・『王朝国家国政史の研究』 坂本賞三編 吉川弘文館 1987年
- ・『古代末期政治史序説』 石母田正 未来社 1956年
- ・『平安前期政治史序説』 佐藤宗諄 東京大学出版会 1977年
- ・『日本の古代』（全15巻・別巻1） 中央公論社 中公文庫 1995年
- ・『石母田正著作集』 石母田正著、青木和夫他編 岩波書店 1988年
- ・『中国礼法と日本律令制』 池田温編 東方書店 1992年
- ・『律令国家と古代の社会』 吉田孝 岩波書店 1983年
- ・『日本古代の社会と国家』 吉村武彦 岩波書店 1996年
- ・『日本律令国家論攷』 青木和夫 岩波書店 1992年
- ・『平安宮成立史の研究』 橋本義則 塙書房 1995年
- ・『律令官僚制の研究』 吉川真司 塙書房 1998年
- ・『日本古代の交通と社会』 館野和巳 塙書房 1998年
- ・『古代荘園史料の基礎的研究』（上・下） 石上英一 塙書房 1997年
- ・『奈良平安時代史研究』 土田直鎮 吉川弘文館 1992年
- ・『荘園史の研究』（全3巻） 西岡虎之助 岩波書店 1966年

◆中 世◆

- ・『平安貴族社会の研究』 橋本義彦 吉川弘文館 1987年
- ・『石母田正著作集』 石母田正著、青木和夫他編 岩波書店 1988年
- ・『日本中世の経済構造』 桜井英治 岩波書店 1996年
- ・『鎌倉時代の朝幕関係』 森茂暁 思文閣出版 1991年
- ・『南北朝期公武関係史の研究』 森茂暁 文献出版 1984年
- ・『室町幕府解体過程の研究』 今谷明 岩波書店 1985年
- ・『鎌倉時代政治史研究』 上横手雅敬 吉川弘文館 1991年
- ・『日本中世の地域と社会』 三浦圭一 思文閣出版 1993年
- ・『中世京都文化の周縁』 川嶋將生 思文閣出版 1992年
- ・『無縁・公界・楽』 網野善彦 平凡社 1978年
- ・『日本の中世国家』 佐藤進一 岩波書店 1983年
- ・『鎌倉幕府訴訟制度の研究』 佐藤進一 岩波書店 1993年

- ・『室町幕府守護制度の研究』 佐藤進一 東京大学出版会 1988年
- ・『日本中世国家史の研究』 石井進 岩波書店 1970年
- ・『日本領主制成立史の研究』 戸田芳実 岩波書店 1967年
- ・『日本中世農村史の研究』 大山喬平 岩波書店 1967年
- ・『日本中世の国家と宗教』 黒田俊雄 岩波書店 1975年
- ・『日本中世社会構造の研究』 永原慶二 岩波書店 1973年
- ・『王法と仏法』 黒田俊雄 法蔵館 1983年
- ・『日本中世の村落』 清水三男 校倉書房 1948年 『清水三男著作集』 2 1974年所収
- ・『荘園支配構造の研究』 仲村研 吉川弘文館 1978年
- ・『中世・近世の国家と社会』 永原慶二・稲垣泰彦・山口啓二編 東京大学出版会 1986年
- ・『中世社会の研究』 松本新八郎 東京大学出版会 1956年
- ・『中世の社会と思想』(上・下) 松本新八郎 校倉書房 1983・85年
- ・『中世禅宗史の研究』 今枝愛真 東京大学出版会 1970年
- ・『黒田俊男著作集』 法蔵館 1994年
- ・『平氏政権の研究』 田中文英 思文閣出版 1994年
- ・『中世の法と国家』 石母田正・佐藤進一編 東京大学出版会 1960年
- ・『日本中世法史論』 笠松宏至 東京大学出版会 1979年
- ・『中世封建制成立史論』 河音能平 東京大学出版会 1971年
- ・『日本中世政治史研究』 上横手雅敬 塙書房 1970年
- ・『鎌倉幕府御家人制度の研究』 田中稔 吉川弘文館 1991年
- ・『日本中世封建制論』 黒田俊雄 東京大学出版会 1974年
- ・『戦国期の権力と社会』 永原慶二編 東京大学出版会 1976年
- ・『戦国法成立史論』 勝俣鎮夫 東京大学出版会 1979年
- ・『中世民衆生活史の研究』 三浦圭一 思文閣出版 1981年
- ・『中世民衆の生活文化』 横井清 東京大学出版会 1975年
- ・『南北朝内乱史論』 佐藤和彦 東京大学出版会 1979年
- ・『日本前近代の国家と対外関係』 田中健夫編 吉川弘文館 1987年
- ・『日本中世の非農業民と天皇』 網野善彦 岩波書店 1984年
- ・『山城国一揆』 日本史研究会・歴史学研究会編 東京大学出版会 1986年
- ・『中世藝能史の研究』 林屋辰三郎 岩波書店 1962年
- ・『洛中洛外の社会史』 川嶋将生 思文閣出版 1999年

◆近 世◆

- ・『織田政権の基礎構造』(1・2) 脇田修 東京大学出版会 1975・77年
- ・『解体期の農村社会と支配』 津田秀夫編 校倉書房 1978年
- ・『近世国家の成立過程』 津田秀夫 塙書房 1982年
- ・『近世対外関係史の研究』 中田易直 吉川弘文館 1984年
- ・『講座日本近世史』(全10巻) 深谷克己他編 有斐閣 1980～88年
- ・『近世農村構造の史的分析』 長谷川伸三 柏書房 1981年
- ・『近世の支配体制と社会構造』 北島正元編 吉川弘文館 1983年
- ・『近世の村社会と国家』 水本邦彦 東京大学出版会 1987年
- ・『近世封建社会の基礎構造』 朝尾直弘 御茶の水書房 1967年
- ・『近世封建制成立史論』 脇田修 東京大学出版会 1977年
- ・『日本政治思想史研究』 丸山真男 東京大学出版会 1952年
- ・『日本封建思想史研究』 尾藤正英 青木書店 1961年
- ・『近世日本の儒教と文化』 衣笠安喜 思文閣出版 1990年
- ・『天保期の人民闘争と社会変革』(上・下) 百姓一揆研究会編 校倉書房 1980・82年
- ・『日本の封建社会』 中村吉治 校倉書房 1979年

- ・『増補日本封建制下の都市と社会』 原田伴彦 三一書房 1981年
- ・『日本封建制と幕藩体制』 藤野保 塙書房 1983年
- ・『幕藩制国家の経済構造』 長野ひろ子 吉川弘文館 1987年
- ・『幕藩制国家の政治史研究』 藤田寛 校倉書房 1987年
- ・『幕藩制国家論』（上・下） 佐々木潤之介 東京大学出版会 1984年
- ・『幕藩制成立期の基礎的研究』 小村弼 吉川弘文館 1983年
- ・『幕藩制の地域支配と在地構造』 福島雅蔵 柏書房 1987年
- ・『封建社会解体過程研究序説』 津田秀夫 塙書房 1970年
- ・『封建領主制と共同体』 矢木明夫 塙書房 1972年
- ・『地主制成立期の農業構造』 山崎隆三 青木書房 1961年
- ・『日本の近世』（全18巻） 中央公論社 1991～94年
- ・『近世の郷村自治と行政』 水本邦彦 東京大学出版会 1994年
- ・『近世儒学思想史の研究』 衣笠安喜 法政大学出版会 1976年
- ・『丸山眞男集』 岩波書店 1995～97年
- ・『江戸の思想』（1～10号） ぺりかん社 1998年
- ・『豊臣平和令と戦国社会』 藤木久志 東京大学出版会 1985年
- ・『日本近世の村と百姓的世界』 白川部達夫 校倉書房 1994年
- ・『幕藩制国家の琉球支配』 紙屋敦之 校倉書房 1990年
- ・『日本近世のアイヌ社会』 岩崎奈緒子 校倉書房 1998年
- ・『幕末民衆思想の研究』 桂島宣弘 文理閣 1992年
- ・『近世日本と東アジア』 荒野泰典 東京大学出版会 1988年
- ・『国訴と百姓一揆の研究』 藪田貫 校倉書房 1992年
- ・『近世日本の国家権力と宗教』 高埜利彦 東京大学出版会 1989年
- ・『本居宣長』 子安宣邦 岩波書店（岩波現代文庫） 2001年
- ・『身分的周縁』 塚田孝他編 部落問題研究所 1994年
- ・『將軍権力の創出』 朝尾直弘 岩波書店 1994年
- ・『近世京都町組発達史』 秋山国王 法政大学出版会 1980年
- ・『日本都市史入門』（3巻） 高橋康夫・吉田伸之 東京大学出版会 1990年
- ・『思想史の19世紀』 桂島宣弘 ペリかん社 1999年

◆近・現代◆

- ・『近代日本研究入門』 中村隆英・伊藤隆編 東京大学出版会 1977年
- ・『シリーズ 日本近現代史』 全4巻 岩波書店 1993年
- ・『近代日本の軌跡』 全10巻 田中彰他編 吉川弘文館 1994年～
- ・『近代日本と植民地』 全8巻 岩波書店 1992年～
- ・『現代日本社会』 全7巻 東京大学社会科学研究所編 東京大学出版会 1991年
- ・『年報・近代日本研究』 シリーズ 山川出版社 1979年～
- ・『20世紀システム』 全6巻 東京大学社会科学研究所編 東京大学出版会 1998年
- ・『日本近代史における転換期の研究』 坂野潤治・宮地正人編 山川出版社 1985年
- ・『明治維新』 遠山茂樹 岩波書店 1951年
- ・『明治維新政治史研究』 田中彰 青木書店 1963年
- ・『明治維新の権力基盤』 芝原拓自 御茶の水書房 1965年
- ・『明治維新』 永井道雄・Mウルティラ 東京大学出版会 1986年
- ・『明治維新の国際的環境』 石井孝 吉川弘文館 1957年
- ・『日本近代化の世界史的位置』 芝原拓自 岩波書店 1981年
- ・『明治維新と近代化』 桑原武夫 小学館 1984年
- ・『明治維新とナショナリズム』 三谷博 山川出版社 1997年
- ・『近代日本と国語ナショナリズム』 長志珠絵 吉川弘文館 1998年

- ・『幕末・明治期の国民国家形成と文化受容』 西川長夫・松宮秀治 新曜社 1994年
- ・『近代日本の差別と性文化』 今西一 雄山閣 1998年
- ・『比較国制史研究序説』 鈴木正幸ほか編 柏書房 1992年
- ・『日本近代国家の形成』 原口清 岩波書店 1968年
- ・『明治政治史の基礎過程』 有泉貞夫 吉川弘文館 1980年
- ・『明治憲法体制の確立』 坂野潤治 東京大学出版会 1971年
- ・『明治国家形成と地方経営』 御厨貴 東京大学出版会 1980年
- ・『明治国家形成と伊藤博文』 坂本一登 吉川弘文館 1992年
- ・『明治維新と宗教』 羽賀祥二 筑摩書房 1994年
- ・『日本の近代化と民衆思想』 安丸良夫 青木書店 1974年
- ・『近代天皇制の支配秩序』 鈴木正幸 校倉書房 1986年
- ・『近代天皇制の成立』 遠山茂樹編 岩波書店 1987年
- ・『明治大帝』 飛鳥井雅道 筑摩ライブラリー 1989年
- ・『近代天皇像の形成』 安丸良夫 岩波書店 1992年
- ・『近代天皇制の政治史的研究』 高木博志 校倉書房 1997年
- ・『天皇の政治史』 安田浩 青木書店 1998年
- ・『日清戦争の研究』 中塚明 青木書店 1968年
- ・『日清戦争への道』 高橋秀直 東京創元社 1995年
- ・『日本陸軍と大陸政策』 北岡伸一 東京大学出版会 1978年
- ・『日本の大陸政策』 小林道彦 南窓社 1996年
- ・『社会主義運動史』 歴史科学協議会編 校倉書房 1978年
- ・『日露戦後政治史の研究』 宮地正人 東京大学出版会 1973年
- ・『大正デモクラシー論』 松尾尊 岩波書店 1974年
- ・『日本政党政治の形成』 三谷太一郎 東京大学出版会 1967年
- ・『大正政変』 坂野潤治 ミネルヴァ書房 1982年
- ・『大正デモクラシー史論』 安田浩 校倉書房 1994年
- ・『憲政の常道』 小路田泰直 青木書店 1995年
- ・『国民＜喪失＞の近代』 小路田泰直 吉川弘文館 1998年
- ・『資本主義形成期の秩序意識』 鹿野政直 筑摩書房 1969年
- ・『形成期の明治地主制』 丹羽邦男 塙書房 1964年
- ・『近代日本地主制史研究』 中村政則 東京大学出版会 1979年
- ・『近代日本における地主経営の展開』 大石嘉一郎 御茶の水書房 1985年
- ・『近代日本の地域社会と名望家』 高久嶺之介 柏書房 1997年
- ・『危機の中の協調外交』 井上寿一 山川出版社 1994年
- ・『日本帝国主義史』（1・2） 大石嘉一郎編 東京大学出版会 1985・87年
- ・『戦後政治』（上・下） 升味準之輔 東京大学出版会 1983年
- ・『戦後日本の市場と政治』 樋渡展洋 東京大学出版会 1991年
- ・『戦後政治と日米関係』 樋渡由美 東京大学出版会 1990年
- ・『戦時戦後体制論』 雨宮昭一 岩波書店 1997年

◆ 雑 誌 ◆

- ・『考古学雑誌』 日本考古学会編 1号（1910年～）
- ・『私たちの考古学』 1巻1号～5巻4号（1954～59年）
- ・『考古学研究』 考古学研究会編 1号（1959年～）
- ・『古代学研究』 古代学研究会編 1号（1949年～）
- ・『日本史研究』 日本史研究会編 1号（1946年5月～）
- ・『歴史学研究』 歴史学研究会編 1巻1号（1934年1月～）
- ・『日本歴史』 日本歴史学会編 1号（1946年6月～）
- ・『歴史評論』 民主主義科学者協議会編 1巻1号（1946年10月～）
- ・『ヒストリア』 大阪歴史学会編 1号（1951年9月～）

- ・『新しい歴史学のために』 京都民科歴史部会編 1号(1951年～)
- ・『国史学』 (国学院大学)国史学会編 1号(1929年11月～)
- ・『史学雑誌』 (東京大学)史学会編 1編1号(1889年12月～)
- ・『史林』 (京都大学)史学研究会編 1巻1号(1916年1月～)
- ・『歴史地理教育』 歴史教育者協議会編 1号(1954年8月～)
- ・『信濃』 信濃史学会編 1号(1942年1月～)
- ・『歴史科学』 青木書店 1号(1922年5月～)
- ・『立命館史学』 立命館史学会編 1号(1980年5月～)
- ・『古文書研究』 日本古文書学会編 1号(1968年6月～)
- ・『藝能史研究』 藝能史研究會編 1号(1963年4月～)



科目一覽

1 専門科目 日本史学専攻

日本史学専攻1・2回生

	1回生	2回生	3回生	4回生
共通	日本史概説Ⅰ～Ⅷ(各2) 日本現代史概説Ⅰ・Ⅱ(各2) 考古学概説Ⅰ・Ⅱ(各2)			
日本史		*#日本史史料講読(2) 日本文化史Ⅰ・Ⅱ(各2) 日本史学史(2) 日本思想史Ⅰ・Ⅱ(各2)	*#古文書学(2) #日本史特殊講義Ⅰ～Ⅹ(各2)	
考古学	*考古学実習入門(4): 通年	*考古学実習(4): 通年 考古学史(2) 環境考古学(2)	#考古学特殊講義Ⅰ・Ⅱ(各2) 文化財科学(2) 理論考古学(2) 形質人類学(2) 情報考古学(2) *考古学研究法Ⅰ・Ⅱ(各2) *#考古学外書講読(2)	
小集団	* <u>日本史研究入門(4): 通年</u>	* <u>日本史基礎講読(4): 通年</u> * <u>考古学基礎講読(4): 通年</u>	<u>日本史演習Ⅰ(4): 通年</u> <u>考古学演習Ⅰ(4): 通年</u>	日本史演習Ⅱ(4): 通年 考古学演習Ⅱ(4): 通年 *卒業論文(4): 通年

日本史学専攻3～5回生

	1回生	2回生	3回生	4回生
共通	日本史概説Ⅰ～Ⅷ(各2)	*#日本史史料講読(2)		
日本史		日本文化史Ⅰ・Ⅱ(各2) 日本史学史(2) 日本思想史Ⅰ・Ⅱ(各2)	*#古文書学(2) #日本史特殊講義Ⅰ～Ⅹ(各2)	
考古学		考古学史(2) 環境考古学(2) *考古学実習入門(4): 通年	*考古学実習(4): 通年 #考古学特殊講義Ⅰ・Ⅱ(各2) 文化財科学(2) 理論考古学(2) 形質人類学(2) 情報考古学(2) *考古学研究法Ⅰ・Ⅱ(各2) *#考古学外書講読(2)	
小集団	* <u>日本史研究入門(4): 通年</u>	* <u>日本史基礎講読(4): 通年</u>	<u>日本史演習Ⅰ(4): 通年</u> <u>考古学演習Ⅰ(4): 通年</u>	日本史演習Ⅱ(4): 通年 考古学演習Ⅱ(4): 通年 *卒業論文(4): 通年

1. 科目名のカッコ内数字は単位数を示します。
2. *のついた科目は、日本史学専攻の学生のみが受講できます。
3. #のついた科目は、重複受講ができます。
4. 下線のついた科目は、その回生でしか受講できません。

(昼間主コース)日本史学専攻6～8回生、(夜間主コース)日本史学コース6・7回生

	1回生	2回生	3回生	4回生
共通	〔昼〕日本史概説Ⅰ～Ⅷ(各2)	〔夜〕日本史概説Ⅰ～Ⅳ(各2) ＊#〔昼・夜〕日本史史料講読(2)		
日本史		〔昼〕日本文化史Ⅰ・Ⅱ(各2) 〔昼〕日本史学史(2) 〔昼・夜〕日本思想史Ⅰ(2) 〔夜〕日本思想史Ⅱ(2) #〔夜〕日本史特殊講義Ⅰ～Ⅵ(各2)	#〔昼〕日本史特殊講義Ⅰ～Ⅹ(各2) ＊#古文書学(2)	
考古学		〔昼〕考古学史(2) 〔昼〕環境考古学(2) ＊考古学実習入門(4)：通年	＊考古学実習(4)：通年 #考古学特殊講義Ⅰ・Ⅱ(各2) 文化財科学(2) 理論考古学(2) 形質人類学(2) 情報考古学(2) ＊考古学研究法Ⅰ・Ⅱ(各2) ＊#考古学外書講読(2)	
小集団(昼)	＊日本史研究入門(4)：通年	＊日本史基礎講読(4)：通年	日本史演習Ⅰ(4)：通年 考古学演習Ⅰ(4)：通年	日本史演習Ⅱ(4)：通年 考古学演習Ⅱ(4)：通年 ＊卒業論文(4)：通年
小集団(夜)	【＊研究入門(日本史)(4)】	【＊基礎講読(日本史)(4)】	【＊演習Ⅰ(日本史)(4)】	【＊演習Ⅱ(日本史)(6)】

1. 科目名のカッコ内数字は単位数を示します。
2. ＊のついた科目は、日本史学専攻の学生のみが受講できます。
3. #のついた科目は、重複受講ができます。
4. 下線のついた科目は、その回生でしか受講できません。
5. 【 】のついた科目は、開講していません。

2 履修方法

【1・2回生カリキュラム】

必修科目（卒業するために必ず単位を取得しなければならない科目）

①	古文書学（3回生以上）	日本史コース2科目4単位必修
②	考古学実習（2回生以上）	考古学コース4単位必修
③	日本史演習Ⅱ（4回生以上） ゼミナールⅡ（テーマリサーチ）（4回生以上）	日本史コース4単位選択必修
④	考古学演習Ⅱ（4回生以上） ゼミナールⅡ（テーマリサーチ）（4回生以上）	考古学コース4単位選択必修
⑤	卒業論文	4単位必修

登録必修科目（必ず登録・受講しなければならない科目）

⑥	史学概論Ⅰ・Ⅱ（1回生以上）	2科目4単位選択
⑦	日本史概説Ⅰ～Ⅷ（1回生以上） 日本現代史概説Ⅰ・Ⅱ（1回生以上） 考古学概説Ⅰ・Ⅱ（1回生以上）	2科目4単位選択
⑧	日本史史料講読（2回生以上）	日本史コース4科目8単位 （2・3回生で各4単位）
⑨	考古学史（2回生以上）	考古学コース2単位
⑩	考古学特殊講義Ⅰ・Ⅱ（3回生以上）	考古学コース2科目4単位
⑪	文化財科学（3回生以上）	考古学コース2単位
⑫	考古学外書講読（3回生以上）	考古学コース2単位
⑬	日本史研究入門（1回生のみ）	4単位
⑭	日本史基礎講読（2回生のみ）	日本史コース4単位
⑮	考古学基礎講読（2回生のみ）	考古学コース4単位
⑯	日本史演習Ⅰ（3回生のみ）	日本史コース4単位
⑰	考古学演習Ⅰ（3回生のみ）	考古学コース4単位

専門科目以外の登録必修科目

- ・リテラシー入門（教養科目：4単位） 1回生通年
- ・外国文化講読（英語）（人文科学総合講座：4単位） 3回生通年

※社会人学生のみなさんは、③④⑤以外の必修科目、および登録必修科目はありません。ただし、条件の許す限り、上記の必修・登録必修科目は履修してください。

【3～5回生、昼間主コース6回生以上カリキュラム】

必修科目（卒業するために必ず単位を取得しなければならない科目）

①	古文書学	日本史コース 2 科目 4 単位必修
②	考古学実習	考古学コース 4 単位必修
③	日本史演習Ⅱ ゼミナールⅡ（テーマリサーチ）＊	日本史コース 4 単位選択必修
④	考古学演習Ⅱ ゼミナールⅡ（テーマリサーチ）＊	考古学コース 4 単位選択必修
⑤	卒業論文	4 単位必修

＊6回生以上は選択不可

登録必修科目（必ず登録・受講しなければならない科目）

⑥	日本史概説Ⅰ～Ⅷ 史学概論Ⅰ・Ⅱ（人文科学総合講座）	2 科目 4 単位選択
⑦	日本史史料講読	4 科目 8 単位（2・3回生で各4単位）
⑧	考古学史	考古学コース 2 単位
⑨	考古学特殊講義Ⅰ・Ⅱ	考古学コース 2 科目 4 単位
⑩	文化財科学（隔年開講）	考古学コース 2 単位
⑪	考古学外書講読	考古学コース 2 単位
⑫	日本史研究入門	4 単位
⑬	日本史基礎講読	4 単位
⑭	日本史演習Ⅰ ゼミナールⅠ（テーマリサーチ）	（日本史コース） 4 単位選択
⑮	考古学演習Ⅰ ゼミナールⅠ（テーマリサーチ）	（考古学コース） 4 単位選択

専門科目以外の登録必修科目

- ・情報リテラシー（基礎科目：2単位） 1回生前期
- ・外国文化講読（英語）（人文科学総合講座：4単位） 3回生通年

※3～5回生の社会人学生の皆さんは、③④⑤以外の必修科目、および登録必修科目はありません。
ただし、条件の許す限り、上記の必修・登録必修科目は履修してください。
6回生以上の社会人学生の皆さんの必修科目、登録必修科目は、一般学生と同様です。

【夜間主コース6・7回生カリキュラム】

必修科目（卒業するために必ず単位を取得しなければならない科目）

なし

登録必修科目（必ず登録・受講しなければならない科目）

①	研究入門（日本史）	4 単位
②	基礎講読（日本史）	4 単位
③	演習Ⅰ（日本史）	4 単位
④	演習Ⅱ（日本史）	6 単位

※フレックス学生の皆さんの卒業のためのカリキュラムは上記のとおりですが、昼間主コースの必修・登録必修を参照して履修を進めてください。

3 受講登録上の注意

1 回 生

1. 下記の科目は、クラス指定を行っています。指定されたクラスを本登録してください。
 - ①**外国語科目（第1・第2）**⇒クラスは掲示にて発表します。
 - ②**リテラシー入門**⇒クラスは掲示にて発表します。
 - ③**日本史研究入門**⇒クラスは掲示にて発表します。
2. **考古学実習入門**は予備登録科目です。（履修要項参照）
3. その他、1回生配当の登録必修科目を忘れずに登録してください。

2 回 生

1. 下記の科目は、クラス指定を行っています。指定されたクラスを本登録してください。
 - ①**英語Ⅶ・Ⅷ**⇒第1外国語として英語を選択したみなさんが履修します。1回生終了時に希望調査が行われ、4月時にクラスが発表されます。
 - ②**日本史基礎講読／考古学基礎講読**⇒コース別に、クラス指示し、掲示にて発表します。
2. 下記の科目は予備登録科目です。指定された日に予備登録してください（「履修要項」を参照）。予備登録の結果決定したクラスの授業コードを本登録してください。
日本史史料講読、考古学実習
3. その他、2回生配当の登録必修科目を忘れずに登録してください。

3 回 生

1. 下記の科目は予備登録科目です。指定された日に予備登録を行ってください（「履修要項」を参照）。予備登録の結果決定したクラスを本登録してください。
日本史演習Ⅰ、考古学演習Ⅰ、ゼミナールⅠ（テーマリサーチ）*
⇒すでに前年度中に予備登録を済ませ許可を受けたクラスを本登録してください。
日本史史料講読、古文書学、考古学外書講読、外国文化講読（英語）、考古学実習

4・5回生、昼6～8回生

1. 下記の科目は、本年度の登録で卒業見込みがでる方のみが受講できます。決定したクラスを本登録してください。
 - ①**日本史演習Ⅱ、考古学演習Ⅱ、ゼミナールⅡ（テーマリサーチ）***
⇒すでに前年度中に予備登録を済ませ許可を受けたクラスを本登録してください。
 - ②**卒業論文**⇒卒論ゼミと同一のクラスを登録してください。
2. 下記の科目は、本年度の登録で資格取得の見込みがでる方のみが受講できます。授業コードを必ず受講登録OCR用紙に記入し、本登録してください。
 - ①**（教）教育実習**⇒総合演習と同一のクラスを登録してください。7回生以上は、文学部事務室へ個別相談に来てください。
 - ②**（芸）博物館実習**

夜6・7回生

1. 下記の登録必修科目は、すでに前年度中に予備登録を済ませ許可を受けたクラスを登録してください。
 - 演習Ⅱ（日本史）**⇒ただしフレックス学生は、昼6～8回生の1. に準じてください。なお、「演習Ⅰ」の単位が修得できなかったみなさんは、再度「演習Ⅰ」を登録しなおしてください。
2. 下記の科目は、本年度の登録で資格取得の見込みがでる方のみが受講できます。必ず本登録してください。
 - ①**（教）教育実習**⇒総合演習と同一のクラスを登録してください。7回生以上は、文学部事務室へ個別相談に来てください。
 - ②**（芸）博物館実習（4回生のみ）**

*テーマリサーチ型ゼミナールは2001年度以降入学者のみが受講できます。



ユニットプログラムと履修モデル

1 ユニットプログラム

文学部では2004年度より、皆さんの学び方の指針として、ユニットプログラムという考え方を提示することとしました。ユニットプログラムとは、**皆さんの所属する専攻・プログラムの特色を活かした将来像を念頭においたうえで**の学び方・大学生活の過ごし方の指針です。具体的には、専攻・プログラム毎に以下のような3つのユニットを提示します。

① 総合教養形成型ユニット

所属する専攻・プログラムの教学を中心としつつも、文学部の幅広い学問分野を広く修め、それを活かしてどのような将来像を描けるか、を提示します。

② 専門職養成型ユニット

所属する専攻・プログラムの特色を活かした専門的力量や技能などを形成し、それを活かしてどのような将来像を描けるか、を提示します。

③ 研究職養成型ユニット

所属する専攻・プログラムの教学を深く修め、将来、(大学教員などの)研究職を目指す方策を提示します。

また、文学部には10専攻3プログラムがありますので、専攻・プログラムの特性に応じた内容となっています。

そして、これはよく覚えておいて頂きたいのですが、**必ずしもこのユニットの想定する将来像だけが全てではない**、ということです。極端な話をすれば、文学部を卒業して、ロースクールに入って、弁護士になる事だってありえる選択肢なのです(実際、司法試験に合格した文学部卒業生は過去にいますし、2004年度より設置されたロースクールは、法学部卒業生以外も広く門戸を広げています)。皆さんの意欲次第では、どのような道も開けるでしょう。では、なぜこのようなユニットプログラムを提示するかという趣旨は、皆さんが皆さん自身の将来像をよく考えて、それに向かって有意義な(学問やそれ以外も含めた)学生生活が送れるようにしていただきたいからなのです。目指す将来像が明らかになれば、それに向けた学生生活も充実することでしょう。

もちろん大学生活を送っていく中で目指したい将来像が変わることはありますし、それは全く問題ありません。したがって、ユニットプログラムは一つを選択するとか一つのユニットに所属するといったものではありません。今まで申し上げましたように、ここに提示するユニットはあくまでも例示です。これらを参考にして、皆さんが将来を考える一助になるよう願っております。

なお、「ユニットプログラム」は、本専攻を通じて身につく素養や経験を踏まえた卒業後などの想定されるキャリア形成とその他のための学生生活の指針であり、「履修モデル」は、卒業論文で取り扱う研究テーマをタイプ別に分類し、その分野で推奨する履修科目を挙げたものです。それぞれの目的は異なっており、混同しないように留意してください。

日本史学専攻履修モデル(日本史コースの場合)

	総合教養形成型ユニット	
	日本史学専攻	その他専攻
1 回 生	日本現代史概説Ⅰ・Ⅱ 日本史研究入門	歴史観の形成(教養) 新しい日本史像(教養) 東アジアと朝鮮半島(教養) 文化人類学入門(教養) 日本国憲法(教養) 史学概論Ⅰ・Ⅱ(人文)
2 回 生	日本史史料講読二科目 日本史基礎講読	学部全体の専門科目群 副専攻科目など
3 回 生	古文書学	学部全体の専門科目群 副専攻科目など テーマリサーチ型ゼミナール
4 回 生		テーマリサーチ型ゼミナール 卒業論文

	専門職養成型ユニット	
	日 本 史 学 専 攻	そ の 他 専 攻
1 回 生	日本現代史概説Ⅰ・Ⅱ 日本史概説Ⅶ・Ⅷ 日本史研究入門	歴史観の形成（教養） 新しい日本史像（教養） 東アジアと朝鮮半島（教養） 文化人類学入門（教養） 日本国憲法（教養） 史学概論Ⅰ・Ⅱ（人文）
2 回 生	日本史史料講読二科目 日本史学史など 日本史基礎講読	中国史概論（人文） アメリカ史概論（人文） ヨーロッパ史概論（人文） 学芸員課程の科目群・教職関連科目群など イノベーションプログラム ・京都文化リサーチプログラム ・GIS実習アドヴァンストプログラム ・学校教育臨床研修プログラム
3 回 生	古文書学 日本史特殊講義一科目 日本史演習Ⅰ	宗教と社会（教養） 京都学（教養） 学芸員課程の科目群・教職関連科目群など イノベーションプログラム
4 回 生	日本史演習Ⅱ 卒業論文	博物館実習・教育実習

	研究職養成型ユニット	
	日 本 史 学 専 攻	そ の 他 専 攻
1 回 生	日本現代史概説Ⅰ・Ⅱ 日本史概説Ⅶ・Ⅷ 日本史研究入門	歴史観の形成（教養） 新しい日本史像（教養） 東アジアと朝鮮半島（教養） 文化人類学入門（教養） 日本国憲法（教養） 史学概論Ⅰ・Ⅱ（人文）
2 回 生	日本史概説Ⅴ・Ⅵ 日本文化史Ⅰ・Ⅱ 日本史史料講読二科目 日本史学史 日本思想史Ⅰ・Ⅱ 日本史基礎講読	中国史概論（人文） アメリカ史概論（人文） ヨーロッパ史概論（人文） 仏教美術史、オリент美術史など（学際） 文化人類学Ⅰ・Ⅱなど（学際） イノベーションプログラム ・京都文化リサーチプログラム ・GIS実習アドヴァンストプログラム ・人文系デジタルグラフィックプログラム
3 回 生	古文書学 日本史特殊講義二科目 日本史演習Ⅰ	宗教と社会（教養） 京都学（教養） イノベーションプログラム
4 回 生	日本史特殊講義（アドヴァンスト） 日本史演習Ⅱ 卒業論文	

同（考古学コースの場合）

	総合教養形成型ユニット	
	日 本 史 学 専 攻	そ の 他 専 攻
1 回 生	日本史概説Ⅰ・Ⅱなど 日本史現代史概説Ⅰ・Ⅱ 考古学実習入門 日本史研究入門	歴史観の形成（教養） 新しい日本史像（教養） 東アジアと朝鮮半島（教養） 文化人類学入門（教養） 地球科学（教養） 科学と技術の歴史（教養） 自然人類学（教養） シミュレーション（教養） 史学概論Ⅰ・Ⅱ（人文）
2 回 生	考古学概説Ⅰ・Ⅱ 考古学史 環境考古学など 考古学実習 日本史史料講読など 考古学基礎講読	学部全体の専門科目群 副専攻科目など 中国史概論（人文） アメリカ史概論（人文） ヨーロッパ史概論（人文） 神話学Ⅰ・Ⅱ（人文）
3 回 生	考古学特殊講義Ⅰ・Ⅱ 考古学研究法Ⅰ・Ⅱ 考古学外書講読 考古学演習Ⅰ	学部全体の専門科目群 副専攻科目など テーマリサーチ型ゼミナール
4 回 生	日本史特殊講義（アドヴァンスト） 考古学演習Ⅱ 卒業論文	テーマリサーチ型ゼミナール

	専門職養成型ユニット	
	日 本 史 学 専 攻	そ の 他 専 攻
1 回 生	日本史概説Ⅰ・Ⅱ 日本史現代史概説Ⅰ・Ⅱ 考古学実習入門 日本史研究入門	歴史観の形成（教養） 新しい日本史像（教養） 東アジアと朝鮮半島（教養） 文化人類学入門（教養） 地球科学（教養） 科学と技術の歴史（教養） 自然人類学（教養） シミュレーション（教養） 史学概論Ⅰ・Ⅱ（人文）
2 回 生	考古学概説Ⅰ・Ⅱ 考古学史 環境考古学など 考古学実習 考古学基礎講読	学芸員課程の科目群・教職関連科目群など 中国史概論（人文） アメリカ史概論（人文） ヨーロッパ史概論（人文） 神話学Ⅰ・Ⅱ（人文） イノベーションプログラム ・京都文化リサーチプログラム ・人文系デジタルグラフィックプログラム ・学校教育臨床研修プログラム

3 回 生	考古学特殊講義Ⅰ・Ⅱ 考古学研究法Ⅰ・Ⅱ 考古学外書講読 文化財科学 考古学演習Ⅰ	学芸員課程の科目群・教職関連科目群など イノベーション・プログラム
4 回 生	日本史特殊講義（アドヴァンスト） 考古学演習Ⅱ 卒業論文	博物館実習・教育実習

	研究職養成型ユニット	
	日 本 史 学 専 攻	そ の 他 専 攻
1 回 生	日本史概説Ⅰ・Ⅱ 日本現代史概説Ⅰ・Ⅱ 考古学実習入門 日本史研究入門	歴史観の形成（教養） 新しい日本史像（教養） 東アジアと朝鮮半島（教養） 文化人類学入門（教養） 地球科学（教養） 科学と技術の歴史（教養） 自然人類学（教養） シミュレーション（教養） 史学概論Ⅰ・Ⅱ（人文）
2 回 生	考古学概説Ⅰ・Ⅱ 考古学史 環境考古学など 考古学実習 考古学基礎講読	中国史概論（人文） アメリカ史概論（人文） ヨーロッパ史概論（人文） 神話学Ⅰ・Ⅱ（人文） 自然地理学概論Ⅰ・Ⅱ（地理） 環境地理学Ⅰ・Ⅱ（地理） 文化人類学Ⅰ・Ⅱ（学際） イノベーションプログラム ・京都文化リサーチプログラム ・人文系デジタルグラフィックプログラム
3 回 生	考古学特殊講義Ⅰ・Ⅱ 考古学研究法Ⅰ・Ⅱ 考古学外書講読 文化財科学 考古学演習Ⅰ	イノベーションプログラム
4 回 生	日本史特殊講義（アドヴァンスト） 考古学演習Ⅱ 卒業論文	

日本史学専攻モデル

(基：基礎科目、人文：人文科学総合講座科目、哲・心・その他：各専攻科目)

科目区分	日本史コース				考古学コース	
	古代・中世		近世・近代・現代		考古学	
	日本史専攻科目	その他科目	日本史専攻科目	その他科目	日本史専攻科目	その他科目
1 年生 1 回	日本史概説Ⅰ～Ⅳ 日本現代史概説Ⅰ・Ⅱ 日本史研究入門	歴史観の形成(教養) 新しい日本史像(教養) 東アジアと朝鮮半島(教養) 文化人類学入門(教養) エリアスタディ入門(教養) 自然人類学(教養) 史学概論Ⅰ・Ⅱ(人文) 日本史研究法(人文) 宗教学概論Ⅰ・Ⅱ(人文)	日本史概説Ⅴ～Ⅷ 日本現代史概説Ⅰ・Ⅱ 日本史研究入門	歴史観の形成(教養) 新しい日本史像(教養) 東アジアと朝鮮半島(教養) 科学技術と倫理(教養) ジェンダー論(教養) 文学と社会(教養) 日本国憲法(教養) 日本経済概説(教養) 科学と技術の歴史(教養) 史学概論Ⅰ・Ⅱ(人文) 日本史研究法(人文) グローバルヒストリーⅠ・Ⅱ(学際)	日本史概説Ⅰ・Ⅱ 日本現代史概説Ⅰ・Ⅱ 考古学実習入門 日本史研究入門	歴史観の形成(教養) 新しい日本史像(教養) 東アジアと朝鮮半島(教養) 文化人類学入門(教養) エリアスタディ入門(教養) 自然人類学(教養) 地球科学(教養) 科学と技術の歴史(教養) シミュレーション(教養) 史学概論Ⅰ・Ⅱ(人文) 日本史研究法(人文) 宗教学概論Ⅰ・Ⅱ(人文) 自然地理学概論Ⅰ・Ⅱ(地理) 地誌(日本)Ⅰ・Ⅱ(地理)
2 年生 1 回	日本史史料講読 日本史学史 考古学概説Ⅰ・Ⅱ 考古学史 日本史基礎講読	アメリカ史概論(人文) ヨーロッパ史概論(人文) 中国史概論(人文) 神話学Ⅰ・Ⅱ(人文) 東洋思想Ⅰ・Ⅱ(人文) 民俗学Ⅰ・Ⅱ(人文) 日本文学史Ⅰ・Ⅱ(日文) 東洋史学史(東史) 西洋史学史(西史) 民族と文明の美術史(学際) オリエント美術史(学際) 仏教美術史(学際) 日本絵画史(学際) 文化人類学Ⅰ・Ⅱ(学際) 人間と宗教(学際)	日本史史料講読 日本史学史 日本文化史Ⅰ・Ⅱ 日本思想史Ⅰ・Ⅱ 日本史基礎講読	アメリカ史概論(人文) ヨーロッパ史概論(人文) 中国史概論(人文) 社会史Ⅰ・Ⅱ(人文) 日本演劇論(人文) 民俗学Ⅰ・Ⅱ(人文) 民間文芸学(人文) 日本法史(人文) 日本政治史(人文) 日本文学史Ⅲ・Ⅳ(日文) 社会思想史(学際) 仏教美術史(学際) 日本絵画史(学際) 近現代の諸相(学際) エスニシティとナションⅠ・Ⅱ(学際)	考古学実習 考古学概説Ⅰ・Ⅱ 考古学史 環境考古学 日本史学史 考古学基礎講読	アメリカ史概論(人文) ヨーロッパ史概論(人文) 中国史概論(人文) 神話学Ⅰ・Ⅱ(人文) 東洋思想Ⅰ・Ⅱ(人文) 中国哲学史Ⅰ・Ⅱ(中文) 東洋史概説Ⅰ・Ⅱ(東史) 環境地理学Ⅰ・Ⅱ(地理) 民族と文明の美術史(学際) オリエント美術史(学際) 仏教美術史(学際) 文化人類学Ⅰ・Ⅱ(学際) 人間と宗教(学際)
3 年生 1 回	古文書学 日本史特殊講義Ⅰ～Ⅳ 日本史演習Ⅰ	京都学(教養) 観光学(教養) 宗教と社会(教養) 中国哲学史Ⅰ・Ⅱ(中文) 東洋史概説Ⅰ・Ⅱ(東史) 西洋史概説Ⅰ・Ⅱ(西史) 歴史地理学(地理) 民族と芸術(学際) 歴史人類学の諸問題(学際)	古文書学 日本史特殊講義Ⅴ～Ⅹ 日本史演習Ⅰ	京都学(教養) 観光学(教養) 平和と人間の安全保障(教養) 東洋史概説Ⅳ・Ⅴ(東史) 西洋史概説Ⅳ・Ⅴ(西史) 京都の美術(学際) 歴史認識・叙述の諸問題(学際)	考古学特殊講義Ⅰ・Ⅱ 文化財科学 理論考古学 形質人類学 情報考古学 考古学研究法Ⅰ・Ⅱ 考古学外書講読 考古学演習Ⅰ	宗教と社会(教養) 歴史地理学(地理) 民族と芸術(学際)
4 年生 1 回	日本史演習Ⅱ 卒業論文		日本史演習Ⅱ 卒業論文		考古学演習Ⅱ 卒業論文	



学修を進めるにあたって

1 文献資料室と共同研究室

文学部には、教員・学生・院生の研究・学修の場として共同研究室と人文系文献資料室が設けられています。文学部教学の大きな目標である専門的知識・技能の養成や、自主的・集団的な学修・研究の充実のために、この二つの場が大きな役割を果たしています。

〈人文系文献資料室〉

修学館地階にある文献資料室には、主に文学部の学問・研究に関する専門図書、学会や大学が発行する学術雑誌、各種の資料（歴史学関係の史料を含む）、辞典、図録などが集中的に保管されています。それぞれの専攻・コースやインスティテュートに関する専門図書や資料などは、それぞれの専攻が重点をおいてきた専門分野や収書の方針によって特色をもつものとなっていますが、その中でも特に線装本など貴重な図書や、『立命館文学』との交換で寄贈された学術雑誌など、二度と収書することが至難なものについては、別置されています。しかし大部分の図書は開架閲覧方式がとられていて、書庫に入って図書を検索し、閲覧することができます。文献資料室の書庫は下記の通り、各専攻関係の図書は次のように配置されています。

- 書庫A 日本文学・日本史・中国文学・東洋史・製本和雑誌（大学・一般）
- 書庫B キング・サイズなどの大型資料類
- 書庫C 漢籍・埋蔵文化財・未製本カレント・明大本・和装本など ※書庫Cの図書は閉架請求制です。
- 書庫D 哲学・心理学・英米文学
- 書庫E 西洋史・地理学・文化人類学・インスティテュート・地方史・中国雑誌・洋雑誌

研究内容が部分的に重なり、隣接分野となっている専攻間の図書・資料を相互に利用しやすいよう同一書庫に配置しています。それによって広い基礎をもち水準の高い学修研究の発展と、新しい研究課題の発見をが期待できるでしょう。

人文系文献資料室の図書は、全体として専門性の高いものが多く、したがって低回生にとって直接利用できる図書は少なく、広い教養を身につけるための啓蒙書、文学作品、一般の雑誌などについては、中央図書館の利用が望まれます。しかし上回生のレポート作成や卒業論文、修士論文の作成にあたっては、人文系文献資料室に収められた図書の利用が必要となる場合があります。所定の申し込みをすれば、開架閲覧を許していない貴重図書・学術雑誌の閲覧も可能です。

〈専攻・インスティテュート共同研究室〉

専攻院生・学生が教員とともに、専攻の学問研究について自主的な共同研究をおこなう場として10専攻およびインスティテュートそれぞれに共同研究室が設けられています。それぞれ違いがありますが、専攻・インスティテュートの教学にとって基本的な辞典などの図書、また演習・講読などのテーマと直接かかわりのある専門図書などが置かれています。実験実習的な研究教育が重視されている心理学・地理学・日本史学専攻の考古学コースでは、機器・用具類も充実しており、専用の実験・実習室施設もあります。

これら共同研究室は、大学の休業日（土曜日・日曜日・祝日・夏期の一斉休業日、年末年始など）、および授業や卒業論文・修士論文の試問審査など、文学部の教務・事務にかかわって使用制限する場合を除いて、原則として毎日午前9時から午後9時30分まで利用できます。ただし、実際の時間は、専攻によって異なっていますので、各専攻の規定に従ってください。共同研究室の運営や利用の仕方および、日常的な運営については、教員・学生・院生の三者で協議することにしており、相互に円滑で節度のある使用を心がけねばなりません。

2 クラスロッカーの使用法について

(1) クラスロッカーについて

クラスロッカーは、研究入門、基礎講読、講読演習、演習などのクラス単位で必要なものを、一時的に保管しておくものです。例えば、研究入門の講義時に欠席者用レジュメなどを保管したりするために利用するものです。したがって、個人用の荷物を保管するようなことは禁止をしています。また、基本的に、カギをしめないで使用していただきますので、紛失しては困るものなどは収納しないようにしてください。

(2) 使用の手順

1. 文学部事務室へ、クラス単位であらかじめ利用の申請し、使用するロッカーの場所を決めます。

申請は随時受け付けますので、必要がある場合は、文学部事務室で手続きして下さい。

※オリエンテーション期間の「オリター懇談会」で選出する「クラス代表者」が、クラスを代表して手続きをするようにしてください。

2. 使用できる期間内は、必ず指定のロッカーを使用し、クラス単位で管理してください。
3. 使用期限が来れば、クラス単位で荷物の撤収を行ってください。

(3) 注意事項

利用上以下の点に注意して下さい。

- ①クラスロッカーは、事前の申請に基づいてクラス番号を付番し、クラス指定しますので、確認して下さい。
クラスロッカーは1クラス1ロッカーではありません。
- ②ロッカーは整理整頓に心がけて下さい。複数クラスで利用をお願いした場合、必ず物品のクラス間違いがないようにして下さい。
- ③物置ではありませんから、ロッカーに保管するのにふさわしくないものは入れないで下さい。また、施錠しませんので、貴重品など紛失しては困るものは入れないで下さい。
- ④万一紛失・盗難にあった場合、大学は責任を負いませんので注意して下さい。
- ⑤サークルなどの団体が無断で使用した場合は、速やかに撤去します。
- ⑥クラスロッカーの利用期限は、翌年3月15日（休日の場合はその前日）までです。ロッカーにはいつている物はすべて各クラスの責任で移動して下さい。翌年3月16日以降は、文学部事務室の責任で物品の廃棄をおこないます。

3 セミナーハウスの正課利用の手引き

(1) セミナーハウスについて

立命館大学では、正課・課外活動などで活用して、多様な学生生活を通じて得られる「学びと成長」を支援する施設として、セミナーハウスがあります。ここでは簡単に紹介します。ぜひ各クラスで積極的に利用して下さい。

なお、今年の4月から6月にかけて、新入生のクラスとして合宿をする場合は、別途の手続きになりますので、(5)の説明を参照して下さい。

1. 衣笠セミナーハウス（立命館大学より徒歩5分）

①衣笠キャンパスに隣接したアカデメイア立命21の中にあり、洋室の会議室と宿泊室および和室の会議室兼宿泊室を擁し、宿泊できる人数は最大で150名の収容力を持つ施設です。

②国際平和ミュージアムも併設していますので、見学を兼ねてご利用ください。（併設施設は学生証提示で無料）

2. エポック立命21（びわこ・くさつキャンパス内）

①BKCにもセミナーハウスがあります。

(2) 施設の利用料金

正課で利用する場合は、宿泊料は無料となります。なお、正課以外でも担当教員の承認印を得ればクラス単位で利用する時は小集団クラス援助金で利用できます。

(3) 施設の予約方法

利用にあたってはまず利用したいセミナーハウスに電話にて予約をしてください。利用日の3カ月前から1週間前（なるべく2週間前）までに、直接電話で利用期間・人数等を申請し、予約をしてください。（退館時に次回予約日の予約もできます）予約後の手続き等は、衣笠学生センター（研心館2階）に必要な書類がありますので、ご確認ください。

衣笠セミナーハウス：075-465-8110 エポック立命21：077-561-2700

(4) その他

正課以外で利用する場合は、宿泊料が必要です。詳しくは衣笠学生センターにてご相談ください。

(5) 新入生クラス合宿の手続きについて

4月から6月にかけては、クラス、ゼミが集中的に利用する可能性があるため、あらかじめ、学部枠が設けられています。新入生クラスが、クラス合宿を行いたい場合は、この「学部枠」内で優先的に予約することになります。この期間にクラス合宿を行いたいクラスの代表者は、文学部事務室学生係にご相談ください。

4 学生印刷室の利用について

(1) 利用方法の説明

各小集団クラスでは、正課授業時に利用するレジュメ印刷の際に、学生印刷室に設置されている輪転機を利用することができます。輪転機は原稿1枚につき、10部以上の印刷をするときに利用できます。なお、原稿を作成する際にはB4もしくはA4にしてください。

- ①文学部事務室前にある「小集団クラス印刷申請書」に必要事項を記載し文学部事務室窓口申請して下さい。
(事前に小集団クラス担当者許可印が必要です。)
- ②記入された「小集団クラス印刷申請書」と「学生証」を窓口提出して下さい。窓口設置されている受付台帳に記載した後、学生証と引き換えに「印刷機の鍵」をお渡しします。
- ③輪転機は、清心館1階 学生談話室東北角の学生印刷室内にあります。
- ④印刷用紙は、文学部事務室内東側にあります。申請した枚数をもって、印刷して下さい。(印刷に失敗する場合がありますので、若干余分に持って行ってください。学生印刷室内には、コピー機用の用紙が用意されていますが、これはコピー専用ですので、輪転機での印刷には、絶対に利用しないで下さい。)
- ⑤輪転機の利用方法は、学生印刷室内の掲示を確認してください。
- ⑥輪転機の使用が終了したら、速やかに「鍵」を事務室窓口まで返却して下さい。引き換えに学生証を返却します。(未使用の印刷用紙は、事務室内東側の位置に戻してください。)

(2) 「学生印刷室」の利用時間帯

1. 印刷は以下の時間帯で使用するようにして下さい。終了時間には必ず印刷が終了するようにして下さい。

授業日の 9:00~21:30

※窓口時間等は変更する場合がありますので、掲示等注意して下さい。

(3) 利用にあたっての諸注意

- ①鍵は他人に貸し出さないで下さい。また、他人の学生証でカギを貸すことはできません。
- ②「学生印刷室」は印刷物を散らかさないよう、整理整頓に心がけてください。
- ③輪転機が故障したら、機械を無理に操作せずに、事務室まで連絡してください。
- ④不正使用は絶対に行わないで下さい。もし不正利用が判明した場合、所属クラスの輪転機利用禁止、利用代請求などを行います。
- ⑤学生印刷室内には、コピー機用の用紙が用意されていますが、これはコピー専用ですので、輪転機での印刷には、絶対に利用しないで下さい。不正に利用したことが発見された場合は、賠償していただきます。

5 自主ゼミ援助制度について

(1) 自主ゼミ制度について

授業で学んだことをさらに発展させ、その研究成果をまとめていくため、学部内のメンバーで組織された学習グループ（自主ゼミ）に対して、施設貸与や資料作成の費用を援助する制度です。

(2) 参加資格

文学部生・文学研究科生の登録が可能です。他学部・聴講生・科目等履修生・卒業生は登録できません。

(3) 援助内容

1. 経済援助 生協で利用できるコピーカード 1,000円分
2. 施設貸与援助 学習会・研究会のための施設貸与および自治会輪転機使用（用紙は各自で準備）
3. 自主ゼミ用掲示板の使用 清心館1Fにある自主ゼミ用掲示板を使用することができます。

(4) 受付期間・受付方法

登録の受付は、年2回、4月と10月に文学部事務室または文学部自治会（清心館1F）にて行います。

登録手続きの詳細については、別途掲示にてお知らせします。（4月上旬および9月中旬に掲示予定です）

(5) その他

自主ゼミ活動についてはセメスター単位で登録を受け付けます。また、活動終了時に、活動実績・成果を報告してもらいます。

6 「小集団教育推進補助費」の取り扱いについて

(1) 「小集団教育推進補助費」の目的とその適用の範囲について

各小集団クラスにおける学生の自発的・集団的学習、研究活動を行うために必要な以下の目的について補助を行います。「小集団教育補助費」では下記の例のような使用が可能です。その執行については、各小集団において会計担当者を決めて文学部事務室に届け出て下さい。会計担当者には「クラス資料費伝票」を交付しますので、会計担当者が責任をもって管理・執行するようにしてください。

- ①生協発行のコピーカード（1回の購入限度額5,000円、1クラス15,000円まで）
- ②クラス共通のフロッピーディスク（1クラス2,500円まで）
- ③クラス教材用VTRテープ（1クラス2,500円まで）

※その他会計担当者に配布する「小集団教育推進補助費利用の手引」等を参照してください。

(2) 補助額

1クラスにつき年額15,000円です。

(3) 適用期間

毎年4月伝票交付日～翌年2月末まで利用できます。

(4) 使用の流れについて

各クラスで、クラス代表者とともに、「クラス会計」担当者2名を選出してください。

（1回生は、オリエンテーション期間の「オリター懇談会」において選出してください。）



クラス責任者は、事務室が主催する説明会に参加してください。

（説明は、文学部自治会が招集するクラス代表者会議（仮称）を通じて行います。連絡があった場合には、必ず参加するようにしてください。なお、その際には、印鑑を持参の上参加してください。）



「伝票」を交付します。

本学生協（中川会館地下1階）にて物品等の購入ができます。使用方法は、会計担当者に配布する「小集団教育推進補助費利用の手引」および「伝票」の裏書を参照してください。1クラス年間15,000円まで使用できます。使用期間は「伝票」交付日から翌年2月末までになります。伝票をなくした場合は、事務室に申し出てください。



「伝票」を返還します。

使用期限（翌年2月末日）を満了した場合は3月15日（休日の場合はその前日）までに、全額（15,000円）を使用した場合は、直ちに「伝票」を事務室に返還してください。

7 清心館「学生談話室」の利用について

清心館の一階に「学生談話室」があります。これは、学生の交流・休憩、クラス活動、自習等を行うための施設であり、文学部が「学生談話室利用申し合わせ」に基づいて文学部自治会と共同管理しつつ、日常的な運営を学生の自治に委ねています。利用者が相互に譲り合って、気持ちよく利用できるように努めてください。

1. 「学生談話室」は全面禁煙です。
2. 紙コップや空き缶などゴミは必ずゴミ箱へ捨てるようにしてください。
3. 椅子や机などを勝手に動かしたり、汚損したりしないようにしてください。
4. 「学生談話室」を利用して行事や情宣活動を行うことは許可制です。利用を希望する団体は、文学部自治会に相談の上、文学部事務室の許可を得てください。なお、許可された場合も「学生談話室利用申し合わせ」を遵守して利用するようにしてください。

8 立命館大学人文学会

立命館大学人文学会は、立命館大学文学部における学問研究の発展・深化と普及を目的として、文学部の教員・院生・学生によって構成された学会です。

当学会の活動は、1934（昭和9）年『立命館文學』の創刊に始まっています。この『立命館文學』は、斯界の評価も高く、月刊にて定期的に発刊されていましたが、戦争の拡大するなか、1940（昭和15）年10月には、ついに第60号の刊行をもって一時中断のやむなきにいたりしました。しかし戦後間もない混乱期の1947（昭和22）年7月には、早くも『立命館文學』第61号の刊行を再開し、今日にいたっています。

1952（昭和27）年1月に、学会は立命館大学「人文学会」として正式に発足。会則を制定しました。1969（昭和44）年には、新たに学生部会が発足し、更に充実した学会に発展しました。

『立命館文學』の発行は、2005（平成17）年3月現在で、第589号に及んでいます。

人文学会の主要な活動は、『立命館文學』の刊行と教員・学生の研究・学修の助成におかれています。『立命館文學』に掲載された研究論文は、専任教員の論文をはじめ、学部学生の卒業論文のタイトルや院生の修士論文の概要、及び院生のおこなった書評や学界動向の紹介、さらには卒業生や非常勤講師の研究論文も数多く掲載されています。発表された研究論文の内容は、わが国の各分野の学界において高い評価をうけているものが多く、『立命館文學』の学会誌としての水準の高さを示しています。

『立命館文學』に掲載されている研究論文や、修士論文・卒業論文・博士論文（概要紹介）・書評・学会動向などは、教員の講義・演習に生かされ、また学生のグループ研究・個人研究の参考に供されていますが、今後ますますひろく活用されることを期待しています。

「人文学会」はまた院生・学生の自主的研究の助成をも目的としており、そのための事業として、学生部会による研究誌の発行、あるいは公開講演会の開催なども行なっています。学生諸君は人文学会委員を選出し、それを通じて学会運営に参加することとなっています。みなさんが学会活動に深い関心を持ち、積極的に参加されることをつよく望みます。

9 文学部事務室について

(1) 文学部事務室とは

文学部事務室は、文学部の学生のみなさんが必要な手続きをおこなったり、必要な提出物を提出する等、事務手続を行う窓口であるほか、試験や授業に関する連絡を行ったり、履修・進路・留学などの相談に応じる窓口でもあります。なお、電話での対応は、基本的に行っておりませんので、直接の来室、または、メールによる相談をお願いします。

- ◎ 学生印刷室にある輪転機を使用したいとき（学生証が必要です）
- ◎ 各専攻・プログラムの共同研究室を利用したいとき（学生証が必要です）
- ◎ 学割・証明書の発行（可能な限り、証明書自動発行機で購入してください。）
- ◎ 休学・復学・退学や追試験、受講登録、教育実習登録など、各種の手続き書類の配布・受付
- ◎ その他

文学部事務室を通じて、立命館大学が提供するさまざまなプログラムやサービス、施設などを活用し、積極的・主体的な学修・学生生活をおくってください。

(2) 窓口時間

※授業のない期間については、時期によって窓口時間が変わりますので、よく確認してください。

【開講期間中の窓口時間】 9：00～11：30 および 12：30～18：30

2005年度より窓口時間帯が18：30までとなります。ただし、夜を中心に学修する学生、社会人学生で上記時間内に来室する事が難しい場合は、18：30～21：30に来室してください。

なお、17：00以降は学芸員課程についての対応はできませんので注意してください。

(3) 文学部事務室ホームページ

【立命館大学文学部事務室ホームページ】 URL <http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/jimu/>

文学部事務室では、主な情報をホームページで提供していますので、ご覧になってください。

（提供情報の一例）定期試験時間割、休講情報、教職課程・学芸員課程・学部独自インターンシップなどの諸連絡、その他

また、文学部事務室では、メーリングリストによる各種案内や休講情報も、随時行っています。1回生オリエンテーションでの「書類交付ガイダンス」でみなさんに配布する「RAINBOW ID通知書」のIDを活用して、情報入手してください。